

546

74

0<sup>m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>3m</sup> 1 2 3 4 5

始



安田與四郎著

經濟動態の研究

東京 白揚社 發兌

大正  
14. 12. 23  
内交

566-74

## 序

本書は實用經濟學講話の第二篇であつて、實際に起つて來る經濟問題の殆んど全部に亘つて、解説を試みてある。而かも其間自から精粗の別あるは、成るべく現代の要求に適合せしめんことを爲めに外ならない。但し賃銀問題に關する説明を簡單にしてゐるのは、他日賃銀地代論を起稿する豫定だからである。

著者は第二卷に特に力を注いだ積である、經濟學の實用的方面は、循環的變動の觀測を中心とするものと考へたからである。近日本書の續篇として、『投資物としての株式』を發行する筈である

引續き御愛讀を希ふ。

一(三)一

大正十四年十一月

著者識

# 經濟動態の研究 目次

## 第一卷 經濟界の趨勢的變動

第一章	經濟進化の理想……………	(三)
第二章	國民競争の時代……………	(一四)
第三章	貿易に伴ふ正貨の移動……………	(二五)
第四章	對外爲替の騰落……………	(三六)
第五章	不換紙幣濫發の徑路……………	(五二)
第六章	國際間の貸借……………	(六二)
第七章	交通機關の發達……………	(七一)

一(一)一

第八章 物價平準化と國民生活……………(八三)

第九章 生産方法の進化……………(九六)

第十章 産業進化の犠牲……………(一〇八)

第十一章 資本集中の傾向……………(一一九)

第十二章 貨幣價値の漸落……………(一二三)

第十三章 勞働問題の真相……………(一四四)

第十四章 信用の發達と其結果……………(一六一)

### 第二卷 經濟界の循環的變動

第一章 生産消費の隔離……………(一七〇)

第二章 金融市場の繁閑……………(一八二)

第三章 金融緩慢の時期……………(一九三)

第四章 信用膨脹と其結果……………(二〇七)

第五章 景氣振興の第二段……………(二一九)

第六章 諸變動の數量的關係……………(二三三)

第七章 景氣回復期の實況……………(二四七)

第八章 財界の保守性と變動性……………(二六七)

第九章 金融市場の危機……………(二八〇)

第十章 大正九年の恐慌……………(二九四)

第十一章 整理收縮の困難……………(三一七)

第十二章 景氣循環の結果……………(三二八)

第十三章 景氣循環と其對策……………(三四四)

第十四章 經濟界の季節的變動……………(三五九)

第十五章 公平なる分配の基礎……………(三七〇)

第十六章 企業計畫の採算……………(三八五)

……………(目次終)……………

# 經濟動態の研究第一卷

安田與四郎著

## 經濟界の趨勢的變動

### 緒言



總ての經濟現象は、社會の進化と密接不離の關係を持つ、隨つて此事實を無視して經濟界に現はれる種々の變化を説明することは、絶対に不可能である。けれど詳細に人類進化の跡を尋ねて、それと相關聯して起つた經濟上の變化を、一々説明することは、餘りに六ヶしい仕事でもあり、且つ餘りに學究的な方法である。されば吾人は現

代社會との交渉が薄い方面は、出来るだけ省略し、現に尙ほ繼續してゐる歴史的潮流と其將來とに主力を注いで、經濟的進化の理法を説明したいと思ふ。

過去數千年に亘つて人類が經驗して來た總ての生活方法は、現在地球の何處かに、其標本を残してゐる。随つて現代社會といふ言葉を廣義に解すれば、總ての生活様式を包括するわけだが、吾人はその意味を局限して或る程度まで文化の進んだ邦國にのみ適用する。例へば狩獵牧畜のみを生業とする社會の如きは、吾人の生活とは餘り縁遠いからである。但し説明の都合上、屢それ等の社會にも言及する必要があるは勿論である。

### (一) 種族の繁榮と生活の向上

人生の目的に關する哲學的研究は、姑くそれを専門家に委ね、單に經濟行爲の動機に就いて見れば、其目的は分明に生活の向上と種族の繁榮とに在りと斷定し得られる。勿論生活の向上といふ目的の中には、精神的分子も物質的分子も、共に包含されてをり、子孫の繁榮といふ中にも、量的分子と質的分子が含まれてゐる。随つて其理想の實現を單に物質的數量によつて現はすことは、決して當を得た見方ではない。けれど數量によつて表現し得ない諸現象は、經濟學の對象としては、頗る取扱ひ難いものであるから、已を得ず、數量的觀察を基本として、偶精神的方面に論及する。無形の富を認むる以上、勿論精神的愉樂の價值をも承認してゐるのであるが、貨幣に換算し得

ない事物は、他と比較する途がないから、之を省略せざるを得ない。

生活の向上は生活資料の數量的増加よりは、寧ろ其實質的改善を主眼とする。子孫の繁榮に就いても、現代人の意圖は主として其素質の向上發展を望んでゐるが、生殖機能を人爲的に支配する方法が、十分に發達してゐない爲めに、運命に服従しつゝ、最善の努力を試みてゐる形である。斯くて人口の増加を中心にして見ると、生活資料の數量的増加が絶對的に必要である。人口論の著者マルサスは、此點を非常に重要視して、他の反面を幾分輕視し過ぎた觀がある。近年の風潮は何れかと云へば、生殖機能の人爲的調節によつて社會の實質的向上を圖る方に傾いてゐる。但し此問題に關して總ての利害を較量して、適切な斷案を下した人は無いようである。總ての社會科學と生物學とに立脚して、周到な研究を遂げた後でなければ、輕々しく斷定すべき事柄でないからである。隨つて吾人は唯生殖制限の研究が、近き將來に於ける學界の重大問題

題となるべき事を豫言するに止め、大體は現状を基礎にして、經濟進化の方向を叙述する。

人口は制限されなければ幾何級數的に増加し、人類の生活資料は算術級數的にしか増加せぬとは、マルサスの人口論の土臺であつて、彼は北米新開地を例として、人口は十五年間に二倍すべき可能性を持つと云ひ、食物の供給は到底それに伴ひ得ない。其處で人口の増加に對して種々の人爲的制限と、自然的制限とが行はれると説いてゐる。近頃英國の學者グレゴード博士は「地球に收容し得る人間の總數は、精密な計算上、六十六億を超ゆることは出来ない。世界の現在總人口は十七億であるが、過去に於けるが如く將來も六十年を以つて世界の全人口が倍加するとせば、百二十年後には満員になる。斯くて人類は食糧を求めると、大なる困苦を受けるであらう。若し右の事實を疑ふものあらば、過去百二十年を顧るがよい、米國に就いて云へば、百二十



年前の總人口は現在の紐育市の人口にも足りなかつた。その六百萬人から現在は一億に増加してゐる。東洋方面は現在でも満員であり、一般に非常に餘裕ありと考へてゐる阿弗利加さへも、全北米の總人口より三千五百萬人丈け多くを收容してゐる」と述べ、而かも「將來に於る人口の増加率は、(一)戦争防止實行、(二)醫學の發達、(三)衛生設備の完備、(四)種々の社會施設等により、過去以上に烈しくなる」と附言してゐる。單に之れ等の説明を聞くと、吾人は人類社會の將來に就いて、多大の恐怖を感ぜざるを得ない。經濟學を研究するに當つても、勿論此の如き傾向の存續を無視するわけには往かぬ。併しそれ以上に深く念頭に刻んで置かねばならぬのは、人類が總ての境遇に順應して往く力を持つてゐる點である。生物界の最優者たる位地は、それによつて保持されて來たのである。その力はまだ百年や二百年の中には喪失されまい、但し人類がより高い位地に上げば上るほど、一層強く自然力の抵抗に會ふことは、豫

め覺悟して置かねばならぬ。

## (二) 人口の自然的制限

古い倫理觀念に従へば結婚延期以外の人為的人口制限は、概ね悖徳行爲と見做される、果して然るや否やは大に議論の餘地ある處だが、此問題に立入ると際限がなくなるから、可成り強度に人為的制限が、人口の増加率を抑へてゐるといふに止めよう。自然的制限として挙げられるのは、(一)飢餓、(二)疾病災害、(三)戦争、(四)移住である。その中第四は地方的に見た制限法であつて、世界的に見れば制限よりも、寧ろ増殖奨勵に近いのである。蓋し一國內の過剰人口を他國へ送れば、それ丈け國內の増加制限を緩和し、且つ新移住地に於いては、増加率が高まるからである。過去百數十

制限するようになれば、人口増加率は低下すべく、随つて六十年倍加説を、直ちに承認するわけにも往かぬ。

他の三種の人口制限は、文化の進歩につれて、次第に緩和されてゐる、古代に於いて戦争や悪疫が、どの位人口の増加を妨げたかは、北方蠻民の歐洲侵入史や、ペストの大蔓延によつて立證されてゐる。飢餓による人口制限は、我國の歴史にも屢現はれてゐる。明治以來六十年間の歴史に於いても、此の二つの事實が可成り頻繁に起つてをり、大正十二年の震災の如きもその中に數へ得られる。併し是れ等の事實が總て人類進化の理想に適合しないのは勿論である。其處で出来るだけ、その發生を防がうとしてゐる。それが爲めには出来得る限り、生活資料を充實して、自然力に對抗せねばならず、その手段として經濟上の進化が無限に繼續される。それでも尙ほ人口の増加力には追及し得ない、随つて飽くまで同じ努力を繰返さねばならぬのである。

## 第一章 經濟進化の理想

### (三) 生活の實質的改善

生活の實質的向上には、二つの目的がある、第一は上述の自然的人口制限に對する抵抗力を高めることであり、第二には人生享樂の程度を高めることである。此二つは結局に於いて第一のみに統一さるべきだが、本能に盲從する生活者に在つては、往々相背馳する。蓄財慾過度の爲めに生命を縮めるもの、消費慾過度の結果、心身を害するもの等は、到る處に發見される。二つの目的が高度に一致した生活こそ、合理的生活法として、推奨に値すべきであらう。儒教は此基礎的觀念から出發して、その實行方法にまで論及してゐる、即ち一種の經濟生活論と稱することが出来る。當今の經濟學は主として生産の増加によつて、民衆をして禮節を知る國民たらしめんとする。如何なる程度まで其目的を達し得たか、本書に説かんとする所は、その歴史的研究に外

ならない。

マルサスの考察は人口の増殖を唯一の目標にしてゐる關係上、甚しく農業尊重主義に傾いてをり、且つ其時勢が産業革命の極めて初期に屬してゐたから、商工業發達に就いての豫想が大分に違ふてゐる。人口論が初めて、世に出てから後の經濟界の變化が、如何に甚しかつたかを知るものは、現状を基礎としての百二十年後の豫想が、恐らく實現すまじきを承認するであらう。人口の増加が生活向上に對する脅威であることは、言ふまでもないが、それに對抗する人類の工夫も、決して輕視すべきでない。單に食料對人口の釣合から見れば、現代は百年以前又は二百年以前より、不良な状態に在るかも知れぬが、而かも多數者の生活程度が當時に比して著しく向上してゐる點には、疑問の餘地があるまい、其處に産業進化の力が現はれてゐるのである。或は曰はん生活の外面的向上は必ずしも實質的幸福の増進を意味しないと、それも一つの見

方である。その正當かどうかは、具體的事實によつて證明する外ない。

#### (四) 維新以後の日本

明治維新から今日に至る六十年間の日本の經濟史は、或る程度まで歐洲に於ける十八世紀末以後の産業進化の縮寫圖だと云へる。此縮寫圖によつて判斷すると、それ以前前三百年間に比べて、國民生活の向上せると同時に、實質的幸福の増進せることも、認めざるを得ない。勿論其一半は政治的進化の賚であるが、主因は矢張り經濟的方面に在ると想ふ。而して此六十年間に人口増加の壓迫は可成り強く現はれてゐるがそれを凌いで生活の向上を圖つた筋道は、略ぼ十九世紀に於ける歐洲先進國のそれに倣ふたものと云へる。

此間に内亂が一度、對外戦争が臺灣征討と北清事變とを合せて、前後五回に及んで

る。對外戦争は人口増加の壓迫を免れんとする國民的協同作業である。古代に於ける遊牧民の移動は、その最も露骨な場合であるが、近代の戦争に在つても、領土支配權の擴大によつて、生活資料の獲得區域を擴めようとする事が、その主要な目的になつてゐる。唯表面上では色々の理由を列擧して、本來の目的を隱匿するに努める。それは要するに外交上の辭令であつて、眞實の目的が其國民の生活の向上に在るは言ふまでもない。

當今我國では朝鮮臺灣滿洲樺太等に、相當多數の移住者を送つてゐるのみならず、それ等の地方より巨多の農産物を取入れて、食料の缺乏を免れてゐる。假りに是れ等の新領土を獲得せざりしならば、人口増加の壓迫は現在よりも更に甚しかつたであらう。最近カナダ北米合衆國が外來移民を排斥するに至つたのも、其主な目的は勿論人口増加の壓迫を避けるに在る。假りに我國にも外國移民が殺到するとせば、矢張り同

じ政策を執る外はあるまい。

前後三回の對外戦争に於いて、國民の負擔した戦費は、驚くべき巨額に上り、尙ほ其上に年々巨額の軍事費を負擔してゐる。それが國富の増進を妨げた程度は、世人の想像以上であらう。乍去結局の計算に於いて損益何れに歸着すべきかは、容易に測るべくもない。此の如き問題は表面上は經濟學の範圍に屬しないようだが、深く考察すればする程、經濟進化の道程に於いて、避け難い出來事たるを了解するであらう。

過去六十年間の我經濟史に於いて、最も著しい事實は、天然物の減少と其價格の騰貴である。之れを木材に就いて見れば極めて明白、近海の魚類、山野の鳥獸、地下の石炭等も亦然り。要するに天産物濫獲の跡は蔽ふべくもなく、將來は大に此點に注意する必要がある。次には國民一般の勤勞時間が大に延長されてゐる、之れは必ずしも悪いことではないが、一部工場労働者に就いて云へば、慥かに體力濫用の弊がある、

之れも亦大に研究を要する。凡そ是等の點に關する對策は、歐米先進國に在つては、既に盛んに研究されてゐる、随つてその跡を辿つても或る程度の解決は出來よう。以下吾人の述べんとする所にも、外國知識の借用の相當に多かるべきことを、豫めお断りして置く。

## 第二章 國民競争の時代

### (一) 種族争闘の進化

生活資料の産額増加が、人口の増加率に追及し得ない當然の結果として、人類は腕力に訴へても、自己及其種族の維持繁榮を圖らうとする。斯くて人間社會は太古より今に至るまで、戦争といふ惡事と、全く縁を切ることが出來ない。けれど其間にも同族相愛の念は、次第に高まりつゝあり、その結果として順次集團的生活の規模を擴大

して、今では國家がその一單位となつてゐる。集團單位の擴大は一面から見れば、外敵に對する抵抗力の増大を目的とするものだが、他の反面より見れば、打算上戦争が不利益な事に歸着するからである。斯くて一般民衆は出來る丈け平和の裡に、生活の向上と種族の繁榮を圖らうとする。

歐洲に於いて國家對立の形態が、略ぼ確立したのは、十七世紀末又は十八世紀初(西班牙王位繼承戦争の前後)と見て可なるべく、世界的に云へばナポレオン没落以後と見て差支あるまい。随つて一國を單位としての經濟政策が組織的に實行されるに至つたのも、十六世紀末以後と稱すべく、佛國の理財家コルベール(一六一九—一六八三)は、國家的經濟政策の初期の實行者と見做すことが出来る。それに比べると支那や日本の方が、早くから國民的統一が完成してゐたのである。

それは兎に角過去一百年間は、國民對立の最高度に發達した時代である、随つて人

類生活の各方面に其色彩が強く現はれてゐる、此大勢を無視して近代の産業進化を説くわけには往かぬ。最近の傾向は幾分列國協調の方に傾いてゐるが、今はまだ其萌芽が認められるといふのみである。

## (二) 國際貿易の發達

國家本位の經濟生活は、國民の増殖繁榮を二つの方法で圖らせた、第一は新領土の獲得、第二は外國貿易の増進である。第一の方法は當然の結果として、他國との衝突を惹起した、それ等の經過は政治歴史の範圍に屬するから、姑く措くとして、茲には第二の方法から如何なる結果が生じたかを考察しよう。

英國に於ける古い記録に依ると千七百四十年に於ける同國の輸出は八百十九萬七千餘磅、輸入は六百七十萬三千餘磅であつたが、二十年後には輸入九百八十三萬磅、輸

出千四百六十九萬餘磅に上つたといふ。その殖へ方は可成り迅速であつたが、千九百二十三年に於ける輸入十億九千八百萬磅、輸出八億八千五百萬磅に比べると、言ふに足らぬほどの少額である。百六十三年間に輸入は百十二倍弱、輸出は六十倍強になつた。幾分は貨幣價值低下の爲もあるが、數量的に見ても驚くべき増加を示したのである。斯くて現代に在つては、外國貿易なしの國民生活を想像することすら不可能である。歐洲大戰當時米國の鐵類輸出禁止によつて、我國民がどの位苦しんだかは、今も世人の記憶に残つてゐるであらう。

而かも此貿易の大發達は、幾多の自然的及び人爲的障礙を凌いで此に至つたのである。自然的障礙は、主として運搬費を指す、これに比べると、人爲的障礙の方が、寧ろ強かつたようである。國際貿易の達の初期に於いて、大抵の國民は貿易の利益をそれによつて收得する金、の多寡に在りて誤認し、盛んに輸入の防遏と輸出の奨励に

努めた、それが貿易の増進<sup>進</sup>を妨げたことは言ふまでもあるまい。その政策の遂行者として、コペルールの如きは代表的人物<sup>力</sup>と見做されてゐる。

### (三) 保護貿易の可否

是れから愈よ各種經濟現象の理論的解剖に移る。最初に貿易の事を述べるのは、それが他の變化を誘導する一大原因を成すからである。外國貿易の利益を輸出超過<sup>額</sup>によつて、計量したのは勿論間違ふてゐるが、保護貿易政策そのものは、全然無意味なものと、決めて了ふわけには往かぬ。

外國貿易の最大任務は、地方的分業を一國內から世界的の廣さに、發展させるのにある。一國內に於て、總ての産業を最も適當せる地方に分布させることが、國富増進人口維持の最善の策であると同じく、全人類の幸福から云へば、總ての産業をして最

も適當せる地方に發達させることが、最も理想的な状態である。随つて貿易の發達を人爲的に阻むのは生産能率の増進を妨ぐるものである。之れを前提とすれば、所謂保護貿易策は、經濟上の原則に背反するものと云はねばならぬ。乍去現代の如き國民對立の時代に在つては、全人類の幸福を目安にして、議論を進めるわけに往かぬ。

或る一國にとつては、關稅其他の方法によつて、外國品の侵入を防ぐ一方、内地に於ける其生産を獎勵するこゝは、必ずしも無意味ではない。但し此政策を行ふに際しては、當初から十分に其目的を定めて置かねばならぬ。通例保護貿易政策を辯護する理由としては、(一)國防上の必要、(二)幼稚産業の保育の二つが挙げられる。國防問題は純粹の經濟上の事項ではないから、姑く措くとして、幼稚産業の保育といふ事は可成り研究を要する問題である。例へば綿糸紡績業は歐米に於いては、多年の經驗によつて、堅固な基礎を有してをり、自然に放任して置いても、他國に壓倒される懸念

はない。我國にも同一事業の發達する見込があるが、自然に放任して置いたのでは、外國の競争に壓倒される虞がある。此場合内地の紡績業が或る程度の發育を遂げるまで、綿糸布の輸入に課税して、外國同業者との競争を避けしむるのは決して不合理とは云へない。但し既に幼稚産業と稱する以上、當初から或る時期に於いて、それを撤廢する見込がなくてはならぬ。此條件の下に幼稚産業の保護は、是認し得らるると思ふ。之れをすら不可なりとせば、先進國に於いて既に強大な競争者の存在する事業は、後進國には容易に起り得ないことになる。之れに就いても多少異論あれど、兀々しければ省略して置く。

#### (四) 既存事業の擁護

最も六ヶしい問題は既存事業を擁護する爲めに、關稅による保護の必要ありや否や

である、我國に於ける米穀の輸入税問題はその適切な一例とすることが出来る。一部の人は農業の保護を國防即ち食料自給の見地から辯護してゐるが、それ以外の理由はないであらうか。マルサスの見解に従へば、イマ少し強い理由が擧げられさうに想ふそれは即ち(一)食料品の尊重、(二)耕作地の愛護、(三)農村の保護といふ三點である。産業革命の先驅を爲した英國では、一時、穀物關稅問題が非常に八ヶましく論議されたが、結局自由貿易論が勝利を占めて、穀物條例の廢止を見たが、その結果は耕作地の荒廢を來し、當今では頗る巨額の外國食料品を輸入せねば、國民を養ふて往くこゝが出来ない。穀物條例の廢止されたのは千八百四十年であるが、それから千八百八十年までの間は、色々の事情殊に外國の戦争(クリミア戦争、南北戦争、普佛戦争等)によつて、外國食料品の輸入が抑制された爲めに、耕作上の改良が盛んに行はれて穀物の増産を促がし、土地の評価は三億磅も増加したと稱せらるゝ。土地荒廢傾向の現は



れたのは、それから以後であつて、千八百八十一年から千九百十年の間には、約三百万エーカーの耕作地が失はれ、其過半は主要穀物の耕作地であつた。殊に千八百八十年代には一ヶ年二千萬磅の割合で、土地の評価が低下したといふ事である。可耕地三百萬エーカーの喪失は、英國民にとつて可成り大なる損害であると同時に、それに附帯して起つた人口の都市集中傾向や、壯丁健康の低下傾向等も、重大なる社會問題として研究さるゝに至つた。斯くて穀物條例廢止の功罪が、新しい問題として蘇つたのである。我國にはまだ土地荒廢の問題は起つてゐないが、最近に於ける小作爭議の頻發は、漸くその時期の接近を想はしめる、随つて米麥輸入關稅の可否は、研究して置く必要がある。而かもそれは單純に農業丈けの立場から解決すべき事でなく、他の産業と相關聯して考へねばならぬから、姑く保留して置く。

### (五) 貿易に順應する變化

政策上の問題は姑く保留するとして、次には貿易の發達に順應して起る各種の變化を考察すべき順序である。處で一言して置かねばならぬのは、經濟界の各部分は有機體の各部分と同様に、相互に順應する性質を持つといふ點である。貿易本位で見れば國內の産業がそれに順應して變化する、國內の産業を本位にして見れば、貿易がそれに順應して發達する。兩者は相互に因果の關係に立つてゐるから、その一方のみを主として觀察するのは、誤解を起し易い。随つて此二つは後に一括して説明するとして此處では差當り相互關係の輪廓丈けを述べて置く。

貿易の發達が内地産業に及ぼす影響は、(一)各種産業の競争範圍を、一國內から國際間にまで推し擴める。(二)その結果として總ての國の産業は、國際競争に於いて最

も有利なものに集中される傾向を示す。(三)それが爲めに多くの産業は大規模の組織に向つて進化する。(四)國內の交通機關が國際競争を目標として發達し、一國の産業政策も貿易本位に傾き易い。(五)産業競争が激甚になるにつれて、各國の産業組織が世界的標準に統一されようとする。(六)一國內に起つた變動が、迅速に他國に波及する。(七)國際間に於ける資本の移動が、盛んに行はれるようになる。(八)一國內の産業をして、次第に自立の力を失はしめる。而して是れ等の事實は、概ね又貿易の發達を促がす原因にもなるのである。

貿易の發達が産業競争の範圍を國際間に推擴めるといふ事實から、物價の世界的平準化といふ現象が生れる。それは同時に貨幣價値の世界的平準化を意味するのであつて、而かも國際間に共通する貨幣は貴金屬そのものであるから、其處には名目貨幣即ち實價を伴はない通貨の存在を許さない。國際貿易差額の決濟が必ず貴金屬によつて

行はれねばならぬ事實から、色々變動が起ると同時にそれに伴ふて色々の誤解が生ずる。次章に於いては、それ等の變動と誤解とに就いて述べる。

### 第三章 貿易に伴ふ正貨の移動

#### (一) 輸出入の均衡

國際貿易は資本の國際的移動を除外して見れば、結局に於いて物々交換に歸着する換言すれば永續的輸入超過も亦輸出超過も起らない。此に資本の國際移動を除外する條件を附したのは、或る國の對外放資は、往々輸出超過繼續の原因となり、外資輸入は屢輸入超過の原因となるからである、長期に亘る國際貸借關係は姑く貿易と引離して考ふべきである。尙ほ又産金國に在つては地金が商品として取扱はれるから、其他の商品が繼續的に輸入超過になり得る。

國際貿易は何故に結局物々交換に歸着するか、輸出超過に由る金銀の流入は、忽ち輸入超過の原因となり、輸入超過に伴ふ金銀の流出は、やがて輸出超過の原因になるからである。随つて或國が保護政策其他の方法によつて、人爲的に輸出超過を繼續させようとしても、それは結局徒勞に終はる。此場合英國に於ける海運収入の如きは、勿論商品輸出と同様に見做してゐるのである。是れ等を異分子として控除すれば、商品輸出入額は必ずしも一致せず、貿易以外の受取勘定の多い國では、繼續的に輸入超過を示す。

入超及出超が永續すべきものでないといふ事は、理論上では極めて明白に立證し得らるゝが、各國に於ける表面上の事實が、理屈通りに現はれてゐないので、大抵の人が此根本原則に確乎たる信念を持ち得ず、就中我國に於いて其傾向が強い。その結果として著名の經濟學者の中にも、見當違の意見を公表して憚らないものがある。それ

等の疑惑を一掃する爲めには可成り詳しく過去に於ける貿易の實況を解剖して、輸出超過の起つた筋道を説明する必要がある。

前にも述べた如く貿易の發達は、産業競争の範圍を國際間に擴充させる、その結果總ての商品市價は、世界的平準に歸着せんとする。而かもその生産費は、各國を通じて概ね異なつてゐる。日本の如く天然の富源乏しく、労働能率は低く、資本は缺乏を告げ、企業才能の低劣な國に在つては、歐米と同時間の勞力によつて、同一の品物を生産し得ない。換言すれば生産費が割高になるを免れない。斯かる事情があるに拘らず、どうして貿易の均衡が保たれるか、外國へ賣るべき品物は尠く、外國から買うべき品物は頗る多い、それでも尙ほ貿易の均衡が保たれるだらうかとは、多くの人が日常繰返して説く所である。一寸聞くと如何にも尤もである、けれど然う言ふ人は、代金を支拂はずして物を買うことが絶対に不可能だといふ事を忘れてゐるのである。

## (二) 正貨の流出入

個々商品市價が國際的に平準化せんとする一面、物價も亦平準化せんとする、物價の國際的平準化は國際的貨幣即ち貴金屬價值の平準化を意味する。凡て一國內の物價はその國の貨幣價值と逆比例して動く、正貨の流入によつて貨幣が下れば物價が上りその流出によつて貨幣が上れば物價が下る。而してその作用によつて、國際貿易の均衡は保たれる。

假りに日本の貿易が、連年輸入超過になつて、正貨がそれにつれて流出したとする通貨はそれに應じて縮少するから、貨幣價值は高まり物價は下る、その結果は日本の物價をして外國より割安ならしめねば已まぬ。我國の物價が外國より割高であるのは我國の貨幣價值が外國より割安なことを示すものであるから、貿易は入超になつて割

安な金が輸出される。正貨流出の結果として日本の貨幣價值が高まつて來ると、品物の方が割安になるからそれが外國へ出て、貿易は出超になる。人爲によつて此作用が停止されない限り、貿易の均衡は自然に保持される。此法則は絶對的確實性を帯びてゐるもので、毫末の疑問をも残さない。

處が日清戦争前後から、最近に至る間の我國貿易の實況を見ると、歐洲戦争當時を除いては、概して入超が続いてゐる。其處で一部の人は右の理論に疑問を挿み、何とかして貿易の平衡を回復する必要があると唱へる。此説を爲すものは、何故に我國の貿易が逆調を繼續したかを、了解しないものである。

何等特殊の事情がなくとも、我國の貿易は表面の計算に於いては多少の入超になるそれは輸出品の代價以外に外國から受取る勘定、即ち移民の送金とか、海運々賃の收入とか、あるからである。併し大入超の主要原因は、寧ろそれ以外に在る、即ち(一)

償金の獲得、(二)外資の輸入、(三)通貨收縮の人爲的阻止等である。明治二十九年から三十四年に至る間には、支那から三億七千萬圓の償金を取り、その上に内債五千萬圓を海外に賣却し、四分利英貨公債一億圓を發行してゐる。其結果此六年間には、三億千三百餘萬圓の入超を示し、而かも國內の通貨は却つて増加してゐる。日露戦争が起つてからは、外資の輸入は更に大規模に行はれ、入超額は更に増大するに至つた。若しも外資が輸入されなかつたならば、財界は非常な不景氣に襲はれて物價は下落したであらうが、入超は續かなかつたに相違ない。

### (三) 歐洲大戰以後

歐洲大戰の突發は、我國の貿易の上にも未曾有の變化を起さしめた。凡そ戦争の如き重大事變が起ると、交戦國民は専心戦勝の目的に向つて邁進するから、多年蓄積せ

る資財を軍費に投じて惜まず、随つて其國の貿易が入超に傾いても、國內の通貨は收縮せず、其上政府が間接直接に輸入を援助するから、戦争の終るまでは、それが繼續し自然中立國の貿易をして輸出超過を續けしめる。大正三年下半年から八年へかけての我國の貿易が、空前の大出超を示したのは、其當然の結果に外ならない。而かも戦時中は、各交戦國が何れも正貨の輸出を禁止してゐたので、輸出代金の一部は海外に於いて運用する外はなかつた。それが爲め當初は貿易が出超を示したほどには、國內の通貨は膨脹せなかつた。大正七年頃から、漸く其傾向が著しくなり、米國の金解禁後には急激に膨脹して、九年春に至り其極點に達した。斯くて其當然の結果として、貿易は入超に轉することになつたが、若しも政府が人爲的に通貨の收縮を阻まなかつたならば、十年以後の貿易は尠くもイマ少しは入超額を減じたであらう。

大正九年の恐慌期に際し、政府が極力市中銀行の救済に努めたのは、已むを得ない

措置であつたが、それと同時に巨額の追加豫算を提出して、國庫剩餘金を拂出した。その結果は在外正貨の一部を海外支拂に充當したことになる。通貨の收縮を阻み、次年の入超額を増大せしめた。而かも十一年になると其春の大入超は、甚しく内地の金融を壓迫して、大不景氣を來しさうな模様であつた。然るに其場合にも亦政府は、(一)特殊銀行に對する援助、(二)預金部及び日銀の公債引受け、(三)公債の償還等によつて、通貨の收縮と物價低落とを阻んで了ふた。斯くて十二年上半期の貿易も亦大入超に終ることになつた。而して秋には多少の出超になるらしかつた處へ、關東地方の大震災が起つたので、(一)日銀門戸開放、(二)國庫剩餘金の散布、(三)特殊銀行に對する再度の援助、(四)火災保險會社に對する貸付、(五)民間に於ける貯蓄財の消費等により、形勢逆轉して、一ヶ年を通じて五億圓以上の大入超に終り、十三年に至つて更に其額を増大して、六億圓臺の新レコードを作つた。震災の直後は已むを得な

つたとして、其前後に在つては、政府の遣り方次第で入超を減ぜしめる機會は屢起つたのである。換言すれば正貨の流入によつて、自然に均衡を回復すべき筈のものを人為的に阻止して、逆調を繼續せしめたのである。大正九年から勘定して、十三年までの入超額は約二十二億圓、其内外債以外の貿易外受取勘定を一ヶ年一億五千萬圓宛七億五千萬圓と見ても、十四億五千萬圓は支拂はれた計算である。其内未拂勘定が二億圓あるとしても、十二億五千萬圓になるが、其支拂財源は(一)政府及日銀の在外正貨の減少、(二)民間在外資金の回收、(三)政府及民間の外債に依つたものである。而して政府及日銀の在外正貨減少の結果が、(一)國庫資金の減少、(二)市中銀行の日銀に對する貸越となつてゐるのであつて、十三年十二月十三日の日本銀行勘定に依れば、民間に對する貸出金は、割引手形二億七千七百餘萬圓、貸付金一億六千四百萬圓、外國爲替貸一億千五百餘萬圓、合計五億五千萬圓を超へてゐる。假りに日本銀行が之れ

を貸さなかつたとせば、外國に對する支拂に差支へるから、輸入注文が減つて、入超額はそれだけ少かつた筈である。代金を拂はねば輸入が出来ない處に、貿易の均衡が保たれる理由があるといふ原則には、一點の疑もないのである。

#### (四) 貿易と國民生活

貿易の均衡が自然に保たれるといふ法則を、右の如く正貨出入の關係から解説する事は、學理として少しも間然する處はないが、更に判り易くする爲めには、他の反面から説明する方法もある。之れは全體として見るときは、如何なる國民も生産しない富を消費することは出来ないといふ事である。日常の生活から貸借と過去の蓄積とを除外して見れば、その事は直ちに了解される、而かも貸借殊に國際間のそれは蓄積のない處には行はれないから、過去の蓄積がない限り、生産せざる富の消費は、起らな

いといふ事が出来よう。果して然りとせば、如何なる國民にもせよ、過去の蓄積を喰潰す以外に輸入超過を續け得る筈はないのである。金銀の産出國の國民はその生産によつて外國の商品を購入するのであつて、勿論其例外にはならない。

處で各國の民衆を總括して見れば生存維持と子孫繁殖の必要から尠くも若干の貯蓄はするが、貯蓄を喰潰すことはない。唯その例外として戦争や大天災の場合を挙げられるが、それは稀有の事である。然らば平時に於いて我國の貿易が入超になるのは、貨幣を品物に代へるといふ經濟的行爲に外ならない。而して金を品物に代へるのは、國內に於ける貨幣が、外國の品物よりも潤澤である爲めでなければならぬ。國內に貨幣が缺乏して來れば品物よりもそれを尊重するから、貨物を輸出して正貨を輸入すべき筈である。

國內に於いては、紙幣と正貨との區別はない、随つて正貨が減つても兌換券がそれ

に伴れて收縮せねば、金を品物に代へる行爲は、相變らず繰返される。其處で正貨は益減つて、兌換券に對する比例が低下して來る。然うなると遂には正貨に依る支拂が出来なくなつて、正貨支拂の中止から、爲替下落といふ新現象が起つて來る。

我國では歐洲大戰中から、金の輸出を禁止してゐたが、十二年の震災が起るまでは絶へず在外正貨の拂下げによつて輸入尻を決済して來たから對外的には正貨の輸出によつて支拂をしたのと同じであつた。正貨拂下げの中止以來禁止令が法文通りに行はれることになり、爲替相場は急激に低落し、今では平價から二割以上も低位に落ち、それから種々の影響が起つてゐる。

#### 第四章 對外爲替の騰落

##### (一) 爲替下落の原因

貿易代金の決済は大體爲替の交換によつて行はれる、國際貿易が結局に於いて物々交換に歸着するものである以上、貴金屬の現送をするのは、無駄な事である。可成り巨額の外債が発行された場合にも正貨の現送は餘り行はれない。外債を起せば、それは早晚輸入品代金となつて支拂はれる、随つて正貨を動かすのは、其輸送費を二重に損失するのみならず、徒らに貸借兩國間の財界に變動を起させるからである。最近に於ける獨逸の如く、在內正貨補充の目的で外債を起した場合は勿論其例外に屬する。

戦争や飢饉や天災等の爲めに、或る國民が過去の蓄積を喰込むとき、一時貿易の平衡が破れて、巨額の輸入超過を示すことがある。此場合でも對外支拂による正貨の減少に應じて、國內の通貨を收縮させさへすれば、自然に輸出超過の傾向を惹起して、再び均衡を保たせるが、非常な事變の突發した場合には、大抵の國の政府は人爲的救済策を講ずる。自然に放任して置けば、國內の財界を極端な不況に導き、倒産續出の



慘狀を呈するからである。十二年秋の震災後に於いて我政府の執つた措置は或る程度までは是認すべきものであつた。戦争の場合には、巨額の軍需品を外國から仰ぐ必要ある上に、國內に在つては、絶へず公債を起して、軍費を調達せねばならぬから、貿易の入超に拘らず、通貨が益膨脹するといふ變態が現はれる。

右の如き事情によつて、通貨伸縮の自然作用が停止されると、貿易の入超は何時までも繼續して、對外支拂を不能に陥らしめ、其國の爲替相場を正貨輸送點以下に降らしめる。斯くて爲替が正貨輸送點以下に降る直接の原因は、正貨に依る對外決済の不能に歸着するが、更に深く推究すると眞實の原因は國內通貨の自然的伸縮力の喪失に在るわけである。交換を基礎とする現代の國民生活に於いては、國によつて其分量に差はあるが、必ず或る程度の通貨を必要とする。随つて其伸縮を自然に放任して置きさへすれば、必ず收縮の極限に達する時が来る。その時には金を貨物に代へんとする

ものよりは、貨物を金に代へんとするものが多くなるから、貿易が出超に轉じて爲替を回復させる。政府が人爲的に其伸縮力を制限するとき、此機能が破壊されて、爲替は低位に彷徨する。若し又政府が財政上の都合等から、國內通貨を膨脹させるならば爲替はそれに伴れて低落し、遂に留や馬克の如き極端な處まで往く。

## (二) 爲替下落の限度

常時に於ける爲替相場は、他の貨物と同じように、需要と供給との關係によつて騰落し、而かも其變動の値中は正貨輸送點によつて制限されるから、平價の一割を超ゆることは、絶無に近い。且又歐米間の如く金融關係の密接な處では、國內金利の騰落によつて或る時は外資を誘引し、或る時は對外放資を奨励して、爲替の變動を調節することも出来る。處が正貨支拂が停止されたとなると、金利の高低による調節が不可

能に陥るばかりでなく、正貨輸送點の限界も無くなるから、爲替の騰落する値巾の見當が、殆んど無くなると共に、その思惑賣買が盛んに試みられ、それが相場を左右するらしく見へる。其處で大抵の國に於いて、爲替下落の初期には、それ等の思惑を取縮らうとする。

併し爲替も他の商品と同様に、思惑によつて相場の決まるものではなく、思惑の成功と失敗とを支配すべき標準が必ず存在するのである。爲替を賣買する人は、自からそれを意識すると否に拘らず、自然にその標準點に近い値をつける。偕て此標準が何であるかを説明するに先ち一應爲替に對する世人の見方を、批評して置く必要があるらう。世人は一般に爲替相場を以つて其國の信用を反映するものだといふ。例へば四十九弗八五を平價とする圓貨が、三十八弗に下つたとき、圓貨の信用が十一弗八五丈に低下したのだといふ。爲替賣買の心理状態に立入つて考へれば、然ういふても差支

ないわけである。けれど之れは丁度貨物に對する慾望が價格決定の要因だといふのと同じく、何故に三割とか二割三分とかいふ下落率を示すかを説明するには、不完全なるを免かれない。

中には信用の低下率は、浮動債務の償却される期間に對する割引歩合である、即ち平價に復歸するまでの利子見積だと説く人があるかも知れぬ。斯様に解すれば爲替下落率と對外浮動債務との數量關係が、稍やハッキリするが、併し此説を推し究めて往くと、結局爲替相場は、思惑によつて左右されるといふことになる。換言すれば何が思惑の標準になるかを説明してゐないことになる。或は曰はん思惑の基準となるのは將來の貿易に對する見積とか、保有正貨に對する浮動債務の割合などであると、多くの人は大抵斯様に考へてゐるらしい、けれど之れも亦價格騰落割合の説明にはならない。凡そ貨物の交換割合は、その物の供給高とそれに對する購買力の、數量的關係に

よつて決定されるものであつて、將來に對する豫想は、單に騰落の値巾を、調節する作用をするに過ぎない。随つて如何なる場合にも、其時の供給高と購買力との數量的關係を離れて、市價の決定を説くことは出來ぬ。爲替に在つてもそれと同様に、需給の數量的關係が市價を決定する、而して其數量的關係は、幾分將來に對する豫想によつて調節されるとは云へ、根本的には現在に於ける損益の打算から生ずる。

### (三) 爲替下落の採算點

正貨の出入が停止された場合に於ける爲替下落の限度は、内外物價の差違によつて決する。換言せば爲替の下落率は、國內物價と國際物價の不均衡程度を表示するものである。内地の物價が外國より平均二割高ければ、爲替が二割下落して初めて國際的水準が保たれる。爲替が二割下れば輸入する品物は從來より二割高くなり、輸出する

品物は二割安くなる。その場合内外の物價が動かなければ、外國品を輸入しても儲からなくなるから、輸入注文が減つて外國貨幣の需要が減り、他方外國人は日本の貨物を輸入することによつて、二割儲かる勘定になり、輸出注文が殖へて國貨の需要が殖へる。斯くて國貨爲替は供給過剩の状態から次第に脱出して、需要超過の域に達し、貿易出超額の累積するにつれて、爲替相場が回復して往く。此自然調節作用が完全に行はれる爲めには、爲替が下つても、國內の物價は騰貴せず、爲替が戻るときには、國內の物價はそれに順應して低落し、而して外國の物價が甚だしく變動しないことを條件とする。此三つの條件が充されないと、自然調節の機能が破壊されて、爲替は容易に回復し難いことになる。而かも此三つの條件が完全に充される場合は稀有であつて、大抵は爲替の下落が次第に國內物價を騰貴させて、再び爲替の下落を誘導し、それが相互的に相循環して、遂には、馬克相場の如き慘狀を呈せしむる。一度爲替が下

落すると際限なく低下傾向を續くるのは、斯ういふ事情に基く。

爲替が下がる最初の動機は、右にも述ぶる如く、國內の物價が外國よりも割高な事である。物價の相違が二割であるとき爲替が二割下れば、内外の物價が平準に歸するから、輸出入の均衡がとれて、爲替は回復する筈である。而かも事實は理屈通りには往かぬ、最近に於ける我國の經驗は、其説明材料として、頗る適切なものである。仍つて此にその實況を叙べて、前記三條件の容易に充され難い事情を説明しよう。

#### (四) 圓貨下落の徑路

我國が金の輸出禁止令を發布したのは、大正六年九月であつた、之れは米國が參戰の結果として、禁止令を出した爲めであつて、當時の貿易状態から云へば、少しもその必要は無かつたのである。随つて此禁止令の出た後に於いて、我國の爲替相場は却

つて平價以上に高まつたこともある。而して八年からは貿易が逆調に轉じたけれど、正貨に依る決濟が繼續して行はれてゐたから、十一年五月頃までは對米四十七弗八分の七を最低として概ね四十八弗以上を保ち得た。十一年の晩春からソロ／＼決濟資金の缺乏を感じて來たが、政府及日本銀行所有正貨の拂下によつて、兎も角支拂を濟ませて來た。十二年秋の震災があり、復興材料の見越輸入が盛んに行はるゝに及んで、政府は正貨の拂下を嚴重に制限して、爲替相場を自然に放任する方針を執るに至つたので、その十二月から愈よ内外物價の差違を標準とする下落が初まつた。十二年中の安値は四十六弗四分の一で翌年四月には早くも三十八弗臺の安値が現はれた。其處で政府は再び正貨の拂下けを行ふて、爲替の維持に努めたが、資源の涸渴に制せられて所要資金の全額を拂下け得なかつたので、平價に復歸せしむることが出來ず、十三年晩秋の輸入注文季節に入ると、圓貨先安の懸念に支配されて、外貨が頻りに買競はれ

圓爲替は三十七弗臺の安値に降つた。時の政府が前々内閣と同じ方針を執つたならば恐らく三十二三弗までも降つたであらう。折柄政府が正貨拂下げの再開によつて、三十八弗を維持すべきを聲明したので、その後は三十八弗半を中心にして保合ひ、稍や強含みの裡に十四年春を迎へた。之れが最近に至るまでの、圓貨下落の概略筋道であつて、正貨拂下げによつて維持されてゐたものが、その中止によつて輸送點以下に降つたのである。斯くて眞の下落時代は、十二年末からと見ることが出来る。

### (五) 國內物價の變動

大正十三年の物價騰落には、可成り多分に爲替下落の影響が現はれてゐるが、勿論他の事情も加はつてゐるから、何處までを爲替の影響と斷定するのは困難で、單に或る程度の推測を爲し得るに過ぎない。偕てこの年の物價變動は、分明に之れを二期に分ち得る、第一は年初より七月に至る下落時代、第二は八月以後の騰貴時代である。

爲替の下り初めたのは、前記の如く前年十二月からで、四月には早くも最低に落ちてゐた、それにも拘らず國內物價は七月まで下落の一途を辿つた。そは主として爲替以外の關係に由るが、爲替の方から見ても、(一)爲替先安見越で外國人が日本品を買控へたこと、(二)對外決済資金の需要が、金融を壓迫したこと、(三)爲替下落以前の輸入品が多かつたこと、(四)下半期に於ける爲替の回復を期待してゐたものがあつたこと等を、その原因に數へることが出来る。

或る國の爲替が下つたとき、その國の輸出品の海外市場に於ける相場は、それに伴つて下落する、新規に輸入すれば安値につくから、從來の持荷を賣急ぐ爲めである。此狀況は紐育に於ける生糸相場の上によく現はれてゐる、十二年十二月に八弗六仙であつた最優等格は、六月には五弗二十九仙に落ち、同時に日本生糸の輸入額は上半期

中を通じて月平均二萬三千餘俵に止まり、爲替下落の初期たる二三月には一萬臺に降つてゐる。斯くて内地の生糸相場も爲替安に拘らず漸落して、六月には千五百圓臺の安値を現はしてゐる。

輸出國の爲替下落によつて、輸入國に於ける其市價が低落すれば、消費が刺戟されて、早晩其反動が起る。併しその程度は必需品と贅澤品とによつて、著しく相違すべく、生糸の如きは其點に於いて稍や不利な地位に立つ。市價の下落によつて米國に於ける生糸の消費高は、幾分増加したけれど、年末の相場は尙ほ六弗六十仙に止まり、前年の地位には戻らなかつた。それにしても若し日本以外の生糸の輸出高が著しく多いものであるならば、我生糸の輸出數量は他國の販路を侵略することによつて、大に増加したであらう。

此事實から次の如き原則が抽き出せると想ふ、(一)輸出國の爲替下落は一時輸入國に於ける其市價を下落させるが、やがて消費の増加によつて、回復の途に就く。(二)其回復の程度は需要の彈力の強弱に順應する、(三)輸出商品の競争範圍が廣ければ廣いほど、爲替の下落が輸出増進を促がす度が強いから、市價は急速に回復する傾向を示す。而して爲替下落の輸出品に及ぼす影響が、單に之れ丈けに止まるならば、それは必ず輸出奨励の効果を生ずるが、それ以外の作用が加はる爲めに必ずしも然うは往かない。

### (六) 國內物價の騰貴

爲替の下落はその國の輸出品の國外に於ける價格を低めると同時に、輸入品の國內に於ける價格を騰貴させる、之れは國內貨幣計算に於いて、輸入品原價の高まる當然の結果である。併し爲替下落の初期にはそれ以前の輸入品が残つてゐるから、直ちに

新しい採算に一致せず、數ヶ月の後に至つて輸入原價昂騰の影響が十分に現はれる。而してその頃になると、輸出品の海外に於ける市價も、次第に回復するから、輸出品の國內相場も高まつて來る。斯くして輸出入品は、爲替の下落に順應しようとする。

右の如き變化が可成り高度に現はれたにしても、國內に於ける通貨數量に變化が起らなければ、物價は騰貴しない筈である。貨幣と貨物とは嚴密に相互對立の關係に立つものであるから、一方の騰貴は他方の下落を意味する。而かも爲替が下つた處で、通貨の數量が増さなければ、國內貨幣價值の下落即ち物價の騰貴は起らない。尤も輸入減輸出増によつて、國內に於ける貨物取引量を減すれば、それだけ貨幣の需要が減つて、その下落を惹起す場合を假想し得らるゝが、凡そ現代の經濟組織に於いて、特殊貨物の生産高と消費高とは、急激に増減し難い事情の下に在る、各國民の生活様式が略ぼ一定してゐて、或る種の貨物の在荷が特に著しく減少すれば、その價格をその

割合以上に騰貴させ、それによつて在荷の増加を促がす。斯くて特殊貨物の在荷減少によつて通貨の需要を抑へることは、一時的現象に止まり、後にはその貨物の市價騰貴から、却つて通貨の需要を増させる。十三年中に於ける綿糸市況は、その實例とすることが出来る、即ち最初は生産を手控させ、後には却つて思惑の流行を促がすに至つた、生糸に在つても幾分其傾向が現はれてゐた。

爲替が下つても國內の物價が高まらない爲めには、輸出入品の騰貴が多少抑制される一面、其他の商品が輸出入品の騰貴による通貨の需要増加を相殺する程度まで下落せねばならぬ。換言すれば國內に於ける貨物需要の構成状態を、全般的に變更させねばならぬ。それが爲めには恐らく十數ヶ月の日子を要するであらう、其間官民協力して通貨の膨脹を抑へることに努力したならば、或は其目的を達し得るかも知れぬ。併し何れの國に在つても、左様な政策は完全に遂行されない、一度兌換制度を破壊すれ

ば、通貨の膨脹を避けることは、殆ど不可能に陥り、所謂不換紙幣物價を出現させ、爲替相場を極度に下落させねば己まぬ。

## 第五章 不換紙幣濫發の徑路

### (一) 通貨伸縮機能の破壊

如何なる形式に依るにもせよ、貴金屬の海外輸出を禁止するのは兌換制度の破壊である。併し十二年秋以前に於ける我國の如く、金の輸出を禁止してゐる一面在外正貨の拂下によつて、對外決済を完了させてをれば爲替が平價に近い處を維持するから、不換紙幣に伴ふ弊害は餘り起らない。けれど正貨の出入を自由にして置くのに比ぶれば、矢張り通貨の自然的増減を阻礙する弊なきを得ない。何故なれば正貨拂下げ代金が國庫及日本銀行の手に入る結果、それが國庫支出又は貸出金として再び市中に現は

れる機會が多く、直接外國人に支拂はれた場合とは、趣を異にするからである。假りに大正十年以來、貿易尻の決済を在內正貨の現送によつて行ふたとすれば、正貨準備がそれ丈け減少すると共に、それに應じて國內の通貨を收縮させ、延いて國內の物價を下落させて、其後の入超傾向を緩和したであらう。要するに在外正貨に依る對外決済は、下落すべき物價を高位に居据らせたのである。

十二年冬以後の如く、在外正貨の拂下けを中止して爲替の騰落を自然に放任すれば兌換制度は事實上全く破壊されたことになり、愈よ不換紙幣に伴ふ各種の弊害が相踵いで起つて來る。十三年秋以後に於ける國內物價の騰貴は、既に其一端の現はれたものである。政府は此形勢を眺めて、大に不安を感じ、その十一月下旬には、正貨拂下けの再開始を聲明し、爲替の低落を支ふるに至つたが、此政策が何時まで繼續するか疑問である。由來或る國の通貨が一度不換状態に陥るまきには、それを正常状態に復



歸させる爲には、多大の努力を要する。而かもそれは兌換制度を破壊せねばならぬ國に在つては、容易に實行し難い事である。

正貨に依る對外決済が停止されたとき、その國の通貨は自然的伸縮の機能を喪失する、随つて其後の通貨分量は、政府と發券銀行の手心によつて増減する外はない。大戰後の伊佛や震災後の我國の如く、國費の一部を公債によつて支辦する國に在つては政府は募債の便宜上、通貨の收縮を好まない、將た又新公債の發行それ自體が、通貨増發の變形と見ることも出来る。公債の信用を維持する爲めには、中央銀行は或る程度まで、その擔保力を支持せねばならぬからである。歐洲大戰中我國の貿易が輸出超過になつて、通貨の膨脹を來さんとしたとき、當時の政府は内債の發行によつて兌換券を吸收して、物價の調節を圖らうとしたが、その結果は豫期に反した、公債が擔保になつて、信用を膨脹させたからである。國民の新貯蓄に相應せざる程度に公債が濫

發されるときには、通貨の膨脹を避けることは、殆ど不可能に近い。内亂や對外戰爭の結果が、往々にして不換紙幣濫發を誘導するのは、是れが爲めである。

## (二) 公債と通貨との關係

公債は將來の國民收入を引當てにして、現在の財貨を消費する手段として發行される、その現在額は政府の手によつて消費された財貨の價額を表示するものである、而かもその應募者から見れば、貯蓄の變形である。随つて公債の所有者はその利子收入をその他の收入と同一に見做し、生活費に充當する。斯くて公債の急激なる増加は、夥多の遊食階級を作出したのと同じことになる。而してその資源は、之れを國民の全收入中に求める外はない、換言すれば、年々國民が創造する價値の内から、それだけを政府の手に收めて、公債所有者に分配せねばならない。その手段としては増税と新

募債とが行はれる。公債利拂の財源を直接税に求めた場合には、その結果として通貨の膨脹を惹起す危険は尠いが、間接税や公債に依る場合には必ず通貨の増發を促す公債の新發行が通貨膨脹の誘因になり易いことは、前節にも述べた如くであるが、間接税増徴の場合に於いても、概ね通貨を増發させる。蓋し間接税を増課すれば、被課税貨物の市價は、それに應じて高まり、一面にはその所有者の資産評價を増大して、信用膨脹の誘因となり、他方その取引に要する貨幣の需要増加が、發券銀行をして己むを得ず、貸出要求に應ぜしめるからである。日露戦後に於ける我國の通貨膨脹は主として間接税の増徴に基因する。大戦後に於ける英國の通貨膨脹が比較的輕微であつたのは、公債利拂の財源を主として直接税に求めた爲めである。

公債の急激に増加した場合に於いて、國內の貨幣價值を高むれば、公債所有者の收入はその購買力の増大するにつれて増加するが、納税者の負擔はそれに應じて重くな

る。千九百二十二年に於る佛國の國債現在高は三千百億法餘の巨額であり、それに對する經費は百四十億法と豫算されてゐた。而してその支辦財源は主として公債と間接税とである。假りに急激に通貨を收縮させて、貨幣價值を二倍に高めたとせよ、當に新募債が不可能に陥るのみか、間接税の壓迫は倍加されるか、若くは歳入に大缺陷を生ぜねばなるまい。通貨收縮策が容易に行はれず此國の爲替が一磅に對し八十法以上に低落したのも當然ではあるまいか。貨幣價值を低下させる以外、租税收入の減少を防ぐ道はないのである。戦争が終つた後でも通貨が收縮せず、爲替が回復しないのは斯ういふ事情に基くのであつて、歐洲大陸諸國の爲替相場は、尙ほ容易に回復すまいと思ふ。

### (三) 物價騰貴の誘惑

通例は通貨の膨脹が、物價の騰貴を惹起すに稱せられるが、物價の騰貴が通貨を膨脹させる作用も可成り強く行はれる。消費税の急激な増徴が、通貨増發の起因を成す如き其實例であつて、爲替の下落によつて輸出入品の騰貴した場合にも、政府が特に收縮策を講ぜざる限り、或る程度まで通貨の膨脹を免れ難い。蓋し此場合に於ける物價の騰貴は單に對外貨幣價値の低下に由るとは云へ、その所有者又は生産者の代金受領高を増大させ、その取引の貨幣計算を膨脹させることは、普通の場合と變らない。隨てそれに伴れて手形の流通高が増し、預金と貸出の膨脹を誘導する、當座勘定が膨脹すれば通貨の需要も増さざるを得ない。發券銀行としては、全然其要求を斥け得ない場合が多い、既に兌換を停止するほどの國に在つては極端に貸出を制限すれば、財政の運用に支障を生ずるか、若くは又通貨缺乏に基く財界の動搖即ち恐慌を誘發する虞があるからである。發券銀行が民間の需要に應じて兌換券を増發すれば、手形流通

高は更に増加し、斯くて少くも或時期の間、爲替下落を基本とする變態景氣が現はれる。大正八年より九年へかけては、世界的にその傾向が現はれ、結局大反動を惹起すに至つた。

貨物需要の分布が全般的に變化するのは、十數ヶ月の日子を要するが、重要輸出品は數ヶ月間に爲替に順應する程度まで高まる。此時間上の齟齬が禍因となつて、爲替低落に由る内外物價の平準運動が、圓滑に行はれ得ないのである。例へば我國に於ける十二年末以來の爲替下落は十三年夏期に至つて重要輸出入品の昂騰を促がしたが諸貨物の需要状態には著しい變化が起り得ない爲めに、他の諸商品の下落によつて、それを打消す程の力なく、秋頃から通貨増量の傾向を示すに至つた。日本銀行が極力貸出を制限したならば、或は幾分物價の騰貴を抑へ得たであらうが、色々の事情がそれを妨げて、年末には却つて小銀行援助の目的で震災手形の割引歩合を引下げたほど

である。斯くて當今では國內物價の低落を憚つて、爲替回復策の斷行をすらし、躊躇せねばならぬ狀況である。一度爲替を下落させて了へば、どうしても斯ういふ結果に陥る。

#### (四) 貨幣の信用失墜

當今に於ける我國の如く、爲替は下落してゐても、國內に於ける貨幣の信用が維持されてゐる間は、不換紙幣の弊害は甚しきに至らない。露國や獨逸のように、國民が貨幣を手許に置くことに不安を感じ、一刻も早くそれを貨物に換へようとするに至れば、通貨の回轉速度は急激に増大し、物價は止め度なく昂騰し、それに應じて通貨を増發する必要が起り、斯くて通貨の膨脹と物價の騰貴とが循環的に繰返されて、收拾し難い状態に陥る。此の如きに至る端緒は、政府がその歳出財源を、直接通貨の増發

に求むる場合に生ずるのであつて、對外戦争や内亂の際でなければ起らない。併し然ういふ際でも通貨の發行を歳出財源に繰入れることは、出来る丈け避けねばならぬ。發券銀行が市中銀行の要求に應じて貸出を行ひ、制限外發行をする場合には、それが可成り巨額に上つたにしても、貨幣の信用を失墜することはない。發券銀行それ自體が營利機關であつて、過大の責任を負ふことを回避するからである。

けれど爲替の下落と物價の下落との循環作用が、通貨の需要を過度に増加させて、發券銀行をして自衛上貸出を回收せしむるに至れば、通貨の不足から恐慌を惹起して信用取引の根底を、動搖させる場合は起り得る。それを人爲的に阻まうとすれば、結局貨幣の信用を失墜させる危険がある。随つて然ういふ際には、外債によつて信用を維持する外はない。千九百二十四年春に佛國政府が外債によつて爲替の低落を支へたのは、その一例である。

## 第六章 國際間の貸借

### (一) 外資輸入の是非

大戰開始以前に於いて、英佛獨の諸國は各三四百億圓の對外債權を有し、その利子収入を更に對外放資に充て得る状態に在つたが、大戰突發の結果非常な變化が起り、今では米國が世界第一の債權國で、其額は百五十億弗を超へ、遠からず二百億にも達しさうな模様である。英國は之に次ぐ債權國であり、日本は差引十五六萬圓の借越と見れば充分であらう。是れ等の數字は年々變化するから、詳細な事は判らないが、兎に角非常に巨額の貸借關係が成立つてゐる。

外資の輸入は正貨の借入れてであるが、結局は商品輸入超過の原因になるから、物資の借用に歸着するのである。随つて貿易の逆調を不利とするならば、外資の輸入は見

合はせねばならぬ。けれど外資輸入の利害は、左程單純には斷定するわけに往かぬ。若しも國內に未開發の富源が多く、且つ勞力が剩つてゐるならば、外資を輸入することによつて、利子支拂額以上に生産高を増すことが出来るから、その差支けは儲かる勘定である。此處までの關係は、國內に於ける生産資本の借用と、毫も異なる處がない併し場合によつては、左程單純に見難いこともある。

第一は政府が不生産的事業のために、外債を起す場合である、現代の企業組織に於いて、三五年の間に利益を擧げる見込のない事業は、政府の手に委ねらるゝ。若しそれが將來必ず利益を生むものであるならば、外債に依つても一向差支ないが、道路修築とか、下水工事とか、築港事業のようなものになるに、經濟的の仕事でありながら直接に収入を得る見込がない。是れ等を外債支辨で遂行することは、借金によつて住宅を粧飾する場合の如く、徒らに將來に負擔を残すものである。況んや軍艦建造飛行

機購入の如き財源を外債に求むるをや。政府は不生産的な事業と生産的な事業とを兼營してゐるから、財源の區分が六ヶしいが、其本來の目的が營利に在るのでないから、成るべく國內に資本の剩餘を生じた場合丈に、公債を財源とする事業を進行させる程度に止めないと、國民をしてその生産力に釣合はない生活を營ませることになる。殊に一度に數億圓の大外債を起して、事業を進行させる場合の如き、永續性を持たない物資勞力の需要を起して、徒らに民間財界を動搖させる。日清戦後に於ける償金引當ての事業遂行の如き、その適例とすることが出來よう。日露戦争後にも、同じ失策が繰返されてゐる。

民間の外債にしても、餘り頻繁に行はれるときは、國內の物價及賃銀を高めて外國同業者との競争力を減殺する。隨て其程度や時期等に就いて若干の注意を必要とする

## (二) 外資と物資勞力の需要

外債は正貨の借用である、隨つてそれは直接又は間接に通貨の量と信用の膨脹を惹起して、貨幣價值を下落させ、それに伴ふて色々の副作用を起す。外債に外債を重ねて往く間、國內物價は常に國際水準を上廻はつて、貿易は逆調を持續する。而かも此狀況は無限に繼續さるべきものでないから、早晚外債元利の支拂時期に移らねばならぬ。米國は國富の急激なる増加によつて、比較的順調にこの難關を通過することが出來たが、日本の如き天然の富源の貧弱な國に在つては、左様に簡單に入超時代から出超時代に移り得まい。蓋し國內の物價及び賃銀が、國際的水準より高位に在る間、國內の産業はそれを基準として發達する。而かも愈よ外債元利の支拂をする場合には、物價と賃銀とを國際水準より以下に降らしめねばならぬ。此過程の進行する間、金融

は絶えず緊縮状態を續け、企業利潤は漸減して、失業者は増加する。それに伴れて破産者も出れば、銀行も亦動搖する。その困苦に堪へて物價の水準を低下させることは當今の政治状態に於いては、容易に實行さるべくもない。けれど再び歐洲大戰の如き大事變が突發せざる限り、一度はその時期を迎へねばならぬ。是れも外資輸入の一弊害と稱すべきであらう。

外資の輸入が賃銀を高めるのは、それが産業發展の資源となつて、勞力を需要するからである。而かもそれは國內に於ける貯蓄の如く、永續性を持たないから、反動的に失業者を出す危険が頗る多い。勞力は貨物のように無難作に投げ賣することも出來ず、さりて遊ばせて置くことは、貨物の貯藏に比し遙かに不利である。其處で勞力の需給状態に急激な變化が起るときには、社會的不安を生ずる。過去二三十年間に於ける我國の如く、斷續的に外資を輸入すれば、屢斯様な動搖を惹起し、企業家の打算

を誤らしめるのみならず、勞働爭議頻發の種を蒔く。政府當局者は此點に就いても、甚深の注意を拂はねばならぬ。

### (二二) 資本輸出の利害

貿易が輸出超過になつた場合に、それが入超に轉化するのを防ぐ唯一の方法は、其受取勘定を對外放資に充當することである。それは出超に伴ふ正貨の流入を阻止して國內物價の水準を低位に置くことを意味する。即ち個人が其收入の一部を他人に貸與することによつて、生活費の増高を避けるのと全く同じである。之れほど勤儉貯蓄の主旨に適ふたことはない。而して對外放資は概ね國內に新事業を起すよりも有利な場合にのみ限られるから、理財の意味にも適ふてゐる。随つて元利の回收が確實であらさへすれば、何等の弊害もないといふて差支あるまい。

假りに資本の輸出に多少の弊害がありとせば、(一)然らざれば國內の産業發展に資せらるべきものを、諸外國に貸すことによつて、勞力の需要を抑制すること、(二)他國の産業を發達させることによつて、自國産業の競争者を作出すこと、(三)海外よりの利子收得額が増大するにつれて、國內に遊食者を増大すること、(四)遊食者の増加につれて物質的文明の弊害を助長し、國民の大半をして國際間に於ける貴族階級化せしむる虞あること等であらう。對外債權が餘りに多くなると、他國の政治に干涉する傾向を強めることもその一つに數へ得るかも知れぬ。支那などに對して、特に然ういふ傾向が見へる。

支那に對する列國の放資は、當初から政治的色彩を帯びてゐるとも見られる。資本を投下することによつて、他國を其支配下に置かうとする政策は、埃及などに對しても行はれた事であつて、此種の放資は純經濟的融通とは區別すべきであらう。而して

その事の是非は、政治上の立場から判斷すべきである。

#### (四) 列國間の共助

現代の社會組織が國民の對立競争を基礎としてゐることは、冒頭にも述べた如くであるが、それと同時に各國民が互に相扶け相助けねばならぬ状態に在ることも、承認せねばなるまい。極端に他國を壓迫することは、其國民生活を向上せしむる道でない。此事實はベルサイユ條約成立當時に於いて、歐米の識者が高唱した處であつて、その後の經過も亦それを裏書してゐる。國際分業が高度に發達してゐる現代に於いて、一國の衰頹は他國にも惡影響を與へる。英國が極力獨逸に對する賠償金の賦課を、適度に定めようとしたのは、全く賢明な遣り方云はねばならぬ。千九百二十四年に至つて、獨逸の救済を目的とするドーズ案が採用されたのも、當然の成行きである。



人類は何時でも自己の勞働によつて、その生活を支へて往かねばならぬが、隣人と協力することによつて、その勞働の効果を高められる。國民とても同じ事であつて、互に競争するといふ一面よりは、互に扶け合ふといふ反面の方が遙かに高度に發達してゐるのである。他人が貧乏になつた處で何等の利益も生ぜず、顧客を失ふ丈け、生活の便宜が減少する。獨逸の軍國主義を破壊するのは、歐洲の平和の爲めに必要であつたであらうが、その經濟的發達を妨げるのは、世界の生産額にそれ丈の損失を來すものである。人類の幸福は減じこそすれ、決して増しはせぬ。

國際間に於ける資本の融通は、相互扶助の原則から見ても、歡迎すべき事柄である併しそれを行ふに當つては、飽くまで資本の經濟的效果を土臺にして、浪費に終ることとを避けねばならぬ。

貿易に關しては右の外に、尙ほ關稅政策の問題、關稅賦課の影響、物價が國際水準

に歸着する爲めに生ずる諸種の現象、國民的競争の歸趨等、色々あるが、それ等を詳細に説明してゐると、讀者の倦怠を招く虞があるから貿易論は此邊に止めて置いて、右の諸項目は政策論や財政論等を説く場合に譲り、次には經濟動態研究の中心問題とも云ふべき産業進化論に移る。其順序としては近代式機械工業の發達を述べ、夫に伴ふ農業の位地低下に就て説くのが便宜だま考へる。但し交通機關の發達は之れと密接な關係を持ち、貿易發達の主因となつたものゆへ、差當つてはそれを説明する。

## 第七章 交通機關の發達

### (一) 貨物移動範圍の擴大

歐洲人の所謂産業革命は、交通機關の發達と、新機械の發明といふ二つの原因によつて完成された、此二つは車の兩輪の如く、何れが重要であつたとも云へない。歐洲

に於る交通機關の發達は、道路の修築、運河の開鑿、鐵道の敷設、蒸氣船の發明といふ順序を経て、自動車や、飛行機や、電信電話の利用される現代を迎へたのであつて我國に於ける過去六十年間の經過とは、幾分趣きを異にしてゐる。上記の歴史的發達に就いて一應の記述を試みることは、決して無用の業ではないが、餘り煩雜になる嫌があるから省略して置く事にする。

交通機關の發達は三つの著しい變化を生じた、第一は國內分業の發達、第二は國際分業の發達、第三は人口の大移動である。十八世紀末以前に於いては、大抵の國が自給自足の状態に在つたのみならず、國內に於ける各地方も概して自給自足の状態を續けてゐたのである。交通機關の發達につれて、國內商業が盛んになり、地方的分業が發展して來て、遂に當今の如き産業中心地域を作り出すに至つた。而してそれが轉じて貿易の大發達を促がしたのである。併し交通機關發達の最も著しい効果は、人口の

移動を容易にした點に在らう。亞來利加發見以後の四百年間に、歐洲人のそれ以外の土地へ移住した數は、一億五百万人に上ると稱せられ、而して十九世紀中の移住者は四千万人を降るまいとの事である。十九世紀末から二十世紀初へかけて、人口移動の潮流は殊に急速であつた。而してその結果として、北米や濠洲に於いては、移民の入國を制限する必要を生ずるに至つた。併し各國內に於ける人口の移動はそれにも優して旺んであつた。要するに交通機關の發達に伴れて、貨物及人畜の移動範圍が擴大され、十八世紀末以前には見られない新現象が續出したのである。

人類の長い歴史の上から見れば、産業革命の起源は極めて近代の事だと云へよう。英國に於いて初めて蒸氣鐵道が開通されたのは千八百三年の事であり、而かも鐵道敷設が一般に認められたのは、千八百二十五年にストックツトンと、ダーリントン間の汽車が開通し、同じく三十年にリバプール、マンチエスター間の汽車が開通した後の事

である。即ち今から百年以前の事に過ぎず、それから六十年の後には日本にも既にそれが採用されてゐる。日本は歐米の文化に遅れてゐるといふが、新發明採用の時間的相違は一般に考へられてゐるよりは短少である。唯歐洲に在つては、それが自然の順序を経て發達した處に強味があり、我國は其外形のみを模倣するに急であつた處に非常な弱點がある、此事に就いては後に再説する機會があるであらう。

## (二) 運賃低下の影響

交通機關の發達が、貨物の移動範圍を擴大したといふのには、二つの方面がある、第一は輸送期間を短縮し且つ途中の危険を減少したことであり、第二は輸送費用を軽減したことである。第一の原因によつて腐敗損傷盜難等の事故が滅殺されて、貨物効用の限界を擴大させ、或種貨物の地方的過剰を防ぐことが出来るようになった。第二

の原因によつて諸貨物の價格平準範圍が擴大されて、地方的分業を促進した。此の二の事情と機械の發明とによつて、十九世紀以後に於ける富の増加は頗る急速になり、各國の經濟界に幾多の波瀾が起つたに拘らず、尙且つ人類の全體の生活が向上したのである。部分的に云へば、産業革命は各國の各階級に種々の打撃を與へ、その生活を脅かしたのであるが、全體としての結果が良好であつたのは、生産増加の潮流が如何にも旺盛であつたからである。此全般的恩恵が無かつたならば、産業革命は非常に多くの犠牲者を出したに相違ない。

それは兎も角として交通機關の發達とそれに伴ふ運賃の低下とは、機械の發明と同様に、一部の人を益し、一部の人を苦しめた。利益に浴したものは、効用限界即ち需要範圍の擴大によつて、その生産物の販路の擴まつた貨物の生産者である。損失を被つたものは、他地方からの移入品によつて、壓倒された生産者である。我國に就いて

云へば桑園の耕作者は前者に屬し、棉花の栽培者は後者である。近海の漁業者と遠洋漁業者の間にも、同じような幸不幸が起つた。多數の舊式運輸業者が、汽車や汽船に壓倒されたのは勿論である。

最も適切に運賃低下の影響を被るものは、石炭木材の如き重量貨物である、併し數十年以前に遡つて觀ると、穀物の如きも、可成り強く其影響を被り、それが各國に於ける農業保護問題發生の一大原因を成してゐる。人類全體の利福から云へば、成るべく分業が高度に發達するこゝを助成せねばならぬが、國民の對立を前提とするとき、其處に若干の問題が生ずる。經濟學者の理想が容易に實現しないのは、之れが爲めである。

運賃の低下は物價の國際的平準化運動を、極點まで進行せしめる。それに伴つて各國の企業は、新しい競争者に當面する、我國に於ける多くの事業が、常に壓迫を感じ

てゐるのは、全く是れが爲めである。此點に就いても、何れ後に詳説する機會があらう。

### (三) 交通事業の獨占的傾向

交通機關の發達は、各國經濟界の發展に寄與する所頗る大きかつたが、同時にそれに投下された資本金額も、頗る夥しかつた。斯くて何れの國に在つても鐵道と船舶とは、重要な投資物となつてをり、貯蓄を刺戟する要素となつた。水上運輸業は昔から民間事業として、秩序的に發達して來たが、鐵道の方は初から政府の手で敷設された部分も尠からず、又日本の如く後に至つて政府に買上げられた例もある。由來運輸業はその性質上、獨占事業となるべき傾向を持つてをり、假りに自由競争を許すせば資本の濫費を覺悟せねばならない。例へば鐵道事業に於いて、二大都市を連結する並

行線が許されるならば、明白に二重投資の損失を招くのみならず、兩社間の競争は双方を疲弊せしめて、結局は合併によつて、競争時代の損失回復が企てられる。之れは投資者側から見ても、其便に頼らんとする公衆の方から見ても、決して喜ぶべきことでない。従つて今では大抵の國に於いて、鐵道は特許事業として、獨占を許容するに共に、運賃の決定等に就いて、政府の監督を受けしめてゐる。海運業の方は左程に競争の弊が多くないが、而かも時として共倒れになるような激烈な競争が起る、それ故大抵の航路に於いて、同業者間の協定が行はれ、獨占に近い形になる。併し運賃を過度に高むれば協定に加入しない營業者の侵入によつて、賃率低下を餘儀なくされるから、獨占に伴ふ弊害は餘り起らない。此點も鐵道とは大分に違ふ、線路の敷設を要しない陸上運輸に於いても、略ほ同様である。

交通事業は其性質から云へば、國家が直接に經營するのが正道である、道路と郵便

とは殆んど總て官營になつてをり、電信電話築港等も概ね政府の手に委ねられてゐる國營の可否に就いて最も議論の多いのは、鐵道事業である。けれど日本のように既に國營を實行してゐる處では、今更らそれを民營に移す必要はあるまい。唯其經營方法に就いては國家全體の利益を眼目とすべきで、妄りに營利主義に傾いたり、地方的利害を尊重し過ぎたりしてはならぬ。最近に於ける我國の鐵道政策は、此點に於いて大に非難さるべき處があると思ふ。

#### (四) 大都會の出現

近世に於ける人口移動の結果として現はれた最も重大な事實は、各國に於ける大都會の出現である。之れは機械工業の發達した爲めにも由るが、交通機關の發達の方が一層強い誘因を成してゐる。若しも地方的自給自足の状態が續いてゐたならば、工場

所在地は今日の如く集中されはしなかつたであらう。而して大都會の出現は、色々の新しい問題を惹起したが、その詳細は都市經營政策論中に、説明するのが妥當である。仍つて此には都市内に於ける交通機關の問題に就いて述べる。

倫敦紐育の如き大都會は、其包容する人口に於いては、優に古代の一大國にも相當する。東京や大阪にしても、數百年前の九州や四國位の人口を持つてゐる。而かも其富力に至つては、遙かにそれ等を凌いでゐる。随つて都市と各地方との經濟關係が、頗る重要な事項になつてゐるのみならず、都市内部の生活に就いても色々の問題が起つて來た。就中一區域に於ける過度の人口密集は、道德上、衛生上、多大の弊害を醸すものとして、學者や實際家の注意を喚起した。斯くて多くの國は政府の力で、之れが救済を圖つてゐるが、最近電氣鐵道や自動車が発達するに及んで、それが自然の調節作用をするようになった。電車が採用されるに至つてから大抵の都會人口が、郊外

に分散する傾向を生じ、近き將來に於ては、人口密集の弊害が大分に緩和されさうである。東京の如き高層建造物の危険な都市に在つては、特にその傾向が強かるべき筈である。而して政府は交通機關の改善によつて、それを助成すべきである。

市内電車の經營は、漸次市營になるべき傾向を示してゐる、公衆の監督が有効に行はれる點から見て、鐵道よりも遙かに公有に適當してゐるからである。それと同じ意味で、瓦斯や電燈の如き公益事業も、市營に移る傾向を持つてゐるが、その可否は要するに市民の自治能力によつて決まるわけである。

### (五) 交通發達の副産物

交通機關の發達は、經濟界に色々の影響を與へてゐるが、その中でも特に著しいのは、人口の移動に伴ふ地價の騰貴であつて、新規に貿易港となつた横濱に於いて、將

た又人口集中の目標となつた東京、大阪に於いて、若くは反動的分散によつて、人口の増加を來したそれ等の郊外に於いて、地價が数十倍、數百倍に騰貴した處は尠くない。我國現代の富豪の中には、それによつて資産を増殖したものが極めて多い。各地方に在つても鐵道の敷設等によつて、所有地の値上り益を收めたものが夥しい。是れ等は純粹の不勞所得であつて、尠くも其一半は公共の利益の爲めに收用するのを妥當とする。六十年來此好箇の財源を閑却したのは、我國政治家の大失策と云ふべきであらう。

國家が交通機關の發達を圖る最大の目的は、それによつて天然の富源開發を助成するに在る。而かも我國の鐵道が、その點に於いてどの位の効果を擧げたかは疑問である。鐵道敷設の損益は、單に其營業收支によつて判斷することは出来ない、けれど有利に運用し得ない新線は經濟的効用が乏しいものと斷定して、略ぼ間違あるまい。若

しも開發さるべき富源が豊富であるならば、貨客は自から増加して、其線路を有利ならしめる筈だからである。勿論有利な未開發礦山の存在が確實であるとか、開墾さるべき土地が現存してゐる如き場合には、其開拓の手段として、不利な新線を敷設しても差支ないわけである。線路を敷いて置けば、自然に開けようという如きは、一種の投機的行爲と云はねばならぬ。當今の我國に必要なのは、地方的新鐵道ではなく、寧ろ道路の修築と小運河の開鑿等によつて、小運送の賃率を低下させる事であらう。

## 第八章 物價平準化と國民生活

### (一) 勞働價値の平準化

交通機關の發達に伴ふ運賃の低下は、物價の國際的平準化を、國內に於けると大差なき程度に實現させた。當今では紐育横濱間に於ける海上運賃と、横濱内地間の運賃

諸係りとは輕量貨物に在つては、大差なき状態であるから、距離の問題は唯大量貨物にのみ限られてゐる。随つてそれ等を除外すれば、外國同業者の競争を避け得る道は唯關稅の障壁に置れるのみである。保護貿易と自由主義の論争が相變ず續いてゐるのは、全く之れが爲めである。

全然關稅が賦課されないものと假定すれば、各國民は總て最高能率を擧げ得る産業に従事して、全世界に於ける生産高は、今より遙かに増加するに相違ない、是れが自由貿易論者の理想境である。保護貿易制度の下に比較的不利な産業を繼續してゐる國民は、それだけ生産高を減少してゐるのである。随つて國民的對立の事實を無視すれば、自由貿易制度を採用するに越したことはない。多くの經濟學者が保護主義に反對するのは當然である。

輸出入の均衡を保たせる點から云へば、保護政策を執らうと、自由主義を採用しよ

うと、結果は同一である。借金を除外して云へば、結局に於いて物々交換に歸着する外はないのである。而して國民の生活を安易にするには、國民をして最高能率を擧げしむる制度、即ち自由貿易が最善の道であるのは勿論である。併し保護政策は一時的犠牲によつて、將來の利益を收めようといふのであるから、其打算に間違がないならば、必ずしも不利だと斷定することも出來ぬ。問題はさういふ打算が、確實性を帯びてゐるかどうかに歸着する。此點に就いては何れ後に再説する機會があらう。

それは姑く措き、一國內の物價が國際水準に一致するといふは、何を意味するかに就いて、一應説明する必要があると思ふ。國際間に於ける價値の標準は、金銀を基準として定められる、随つて物價の國際的平準化といふことは、貴金屬對貨物の交換割合が、世界的に一致せんとする傾向を示すことになる。此事實の存在によつて、國內に於ける貨幣價値も、それに順應せねばならなくなる。斯様に貨幣價値が國際水準に



一致することから、價值創造の唯一原因たる勞力評價に、共通の標準が出来上る。換言すれば各國の勞力報酬は、貴金屬の量目によつて、其能率の多少に應じて公平に評價される。それ故各國國民の生活には、それに準じて等差が生ずる。勿論國民が其生産能率に應じて生活するといふことは、貿易の行はれなかつた時代でも嚴存した事實であるが、貿易の發達は其の差違を計量する標準を明確にし、同時にその差違を擴大し又は縮少する機會を與へたのである。或國民が高級の生活をすればする程、他の低級生活をしてゐる國民は、其恩恵に浴するが、而も双方の差違は必ずしも縮少しない、國民的經濟競争の唯一目標は、此點に於いて第一位を争ふことではなければならぬ。

## (二) 貿易と國內産業

貿易を中心とする國際間の産業競争は、近代式大組織企業に於いて、最も露骨に行

はれるが、無意識の間に行はれてゐる競争の方が、一層重大な結果を生ずるものである。露骨な競争の激甚を極めた例としては製鐵事業と、海運事業と、紡織事業を挙げ得る。英米獨佛等の諸先進國企業家達は、是れ等の事業に於いて互に覇を争ひ、政府も間接にそれを援助した。而かも究極の勝敗は、國內に於ける天然の條件の良否によつて決まつたと言へる。天然の條件とは原料の多少、運輸の便否、賃銀の貴廉等を指すのであるが、歸する處は賃銀に比較して、勞働能率の高かつたのである。同じ人間が同じ時間を働いても、天然の資源が豊富な處では、餘計に効果が擧る、随つて賃銀が少し位高くとも、生産費は割安なるを得たのである、天然の資源が貧弱な國では、賃銀が甚しく低廉でなければ、それと競争することは出来ない。而かも一國內の賃銀は各種産業間の競争によつて定まるものであるから、對外競争の熾烈なりといふ理由で、それ等の事業に従事する勞働者のみを低廉に使用するわけに往かぬ。此弱點を補

ふ爲めに、關稅によつて外國品の輸入を防げば、其事業は成立つが、(一)割高生産の負擔を、消費者に轉嫁するのみならず、(二)當然他の産業に流入すべき資本と勞力との供給量を減じ、(三)且つ割高貨物を使用する各種産業の生産費を高める。例ば製鐵業を奨勵する爲めに重稅を課すれば、造船業海運業等が壓迫されるのみならず、農具や紡績機械なども割高になつて、その生産費を高める。而してそれに資本勞力が吸収された丈、他事業の發達は抑へられるのである。

他國に先驅して新機械を發明したり、勞働作業組織を改善することによつて、國際競争場裡に優秀な位地を占めた例は幾らもあるが、それ等は數年にして他國に模倣されて了ふから、永續的效果を示さない。我國に於いては、金利の高いのを以つて、生産費割高の一因に數へる人が多いが、之れは原因と結果とを顛倒したもので、金利は元來有利な新事業の多い國ほど高率に上るべき筈であるから、若しも高金利が産業發

達の自然の狀勢から生じたものであるならば、決して悲觀するには當らないのである

### (二) 我國の高金利

併し我國に於いて兎角高金利時代が永く續くのは、必ずしも有利な事業が多い爲めではない。寧ろその反對に企業利潤の尠いことが金利高の原因を成してゐるようである。それは何故かといふに、日本の企業家は好況期に過大な擴張計畫を立て、その跡始末の爲めに高い利息を負擔してゐるからである。産業革命の初期には外國にも然ういふ例はあつたが、今更ら日本がその眞似をする必要はない。政府も國民も此點に就いて、大に熟慮しなければならぬ。過大な企業計畫が行はれた主因は明治初年以來貨幣價值の下落が頻繁に起つたことである。此事は後に述べるが、當今の貨幣價值を明治初年に比ぶれば、尠くも五分の一以下になつてゐる。

高金利繼續の副因としては、中央及地方財政の膨脹と、それに伴ふ募債の頻發、並に銀行組織又は經營上の缺陷を擧げることが出来る、是れ等も漸次改善して往く必要がある。資本の濫費と金融機關の改善が行はるれば、金利の水準が低くなつて、各種の産業はそれだけ生産費を低下することが出来る。

併し何といふても、國際競争に於ける我國の缺點は労働能率の低劣なのに在る。その原因は(一)新企業濫興の結果として、賃銀が割高であること、(二)天然的条件が貧弱であるのに、無理に新産業を起さうと焦つたこと、(三)各種の社會的設備が歐米に劣つてゐること、(四)國民の多數が新式企業に對する基礎的智能を缺いてゐること、(五)その結果として優秀な企業家や、職工監督が現はれず、(六)且つ政府の施設も宜しきを得ないこと、(七)徒らに歐米カブレの労働爭議が續出すること等である。

#### (四) 生産力相當の生活

如何なる國民にもせよ、生産せざるものを消費するわけには往かない、唯一例外は借金によつて、過去の蓄積を喰込むことだが、種族の繁榮を圖らんとする人類の本能は、貯蓄こそすれ、喰込みを繼續させはせぬ。それ故如何なる國に在つても、戰爭の如き大事變が起らざる限り、富は年々増殖して往く筈である。但しその増殖率には著しい差違が起り得る。それは國民の貯蓄心の厚薄にも由るが、他の原因から來ることもある。その一つは政府や公共團體が公債によつて仕事をする場合で、之れは將來の収入を目當てに、生産せざる以前に消費したことになる。但し國民から見れば、その事業が全然無用なものでない限り、之れも一種の貯蓄だと見ることが出来る。第二は會社や銀行が不正決算をする場合である。我國に於けるそれ等の拂込資本金と積立金

とが、百五十億圓あるとして、平均年率三分配當を引下ければ、四億五千萬圓は會社内に保留される、これは一種の強制貯金法と見ることが出来る。之れに反して利益のないのに、三分配當を増したとすれば、四億五千萬圓が出資者に分配されるから、その大半は生活費に使はれるか、それが貯蓄された時には他の収入を貯蓄することが止められる、即ち一種の濫費獎勵になる。斯様な事實が各處に起つてゐるのは、誠に困つたことである。第三は貨幣價值の低下から生じた利益を、消費する場合である。此場合には過去の蓄積に對する評價は増大するが、實質的には何等の生産物も加はらない、而かも評價増によつて金錢収入が増すから、兎角生活を贅澤にする。大正九年の如き急反動の起つた際には、物價騰貴時代の収益が一種の幻想に過ぎざりしことが能く判る。第四は到底有利に經營し難い事業を繼續する場合であつて、此場合には拂込資本金即ち過去の蓄積によつて従業員的生活費を補給してゐることになる。第五は

投機によつて、損失を重ねるもの、多い場合で、此場合には其儲けによつて生活するものは、他人の蓄積を生活費に充て、ゐるわけである。凡そ是れ等の事實は、資本の蓄積を妨げ國富の増進率を低下させるものとして、出来る丈け其發生を防がねばならぬ。就中悪いのは貨幣價值を屢低下することであつて、他の四つはその副産物と言ふことが出来る。

### (五) 産業組織の改善

各國民の生産能力は或る程度まで、其體力と天然の富源とによつて制限される。即ち或る程度までは先天的運命に支配されるが、併し各種の發明と新工夫とによつて、其能率を高めて往くことが出来る。斯くて人類は過去數十年間に亘つて、生産組織の改善進歩を圖つて來たのである。遊牧時代から農業時代への進化は、其歴史上に於け

る最も目覺ましい時期であつたが、それにも優つて急變を惹起したのは、十八世紀末以後の産業革命である。産業進化の筋道は、之れを三つに大別し得られる、即ち新生産方法の發明と、新機械の發明と、新動力の發見とである。大古以來此三つは並び行はれて來たが、最近に及んで新陳代謝が如何にも急速になつた。而してそれに伴れて種々の經濟的變動が起つたが、その詳しいことは次章以下に述べる。

先天的條件が比較的不利であつたに拘らず極めて短期間に於いて、先進國を凌いだ例として獨逸が挙げられる。十九世紀下半以後の獨逸ほど産業組織改善の工夫の凝された國は尠いと言へる。併しその成功の根本は、寧ろそれ以前の數十年間に培養されてゐたと見るのが、正當ではあるまいか。三十年戦争、七年戦争、並びにナポレオン戦争の舞臺となつて幾度か外國軍隊に蹂躪されてゐる間に、新獨逸發生の萌芽が生れたのである。即ち其間に肉體上、精神上、剛健實質、而して無限の研究心を持つた國

民性が養はれたのである。我國民がそれを真似ようとするのは、決して悪い事ではないが、**素養**の相違を忘れてはならぬ。

天恵の最も豊富な國としては、米國を第一に擧ぐべきである。米國は今や世界の富の一半を占有してゐると稱せられる、誠に羨ましい次第であるが、餘りに順調に發達し過ぎた結果は或る種の缺陷を伴ひはすまいか。尠くも精神上より見たる米國は決して羨むに足らない。我國に輸入される俗惡な活動寫眞は、彼等の精神状態を反映する好模型である。各國民の幸不幸は、外觀のみによつて判斷すべきでない、即ち經濟生活が國民の精神に及ぼす影響も、輕々に看過すべきでない。

## 第九章 生産方法の進化

## (一) 作業方法の進化

生産技術に關する問題は、純粹の經濟學の範圍外に屬し各専門家の研究に待たねばならぬ。經濟學に在つては單に其結果として現はれる各種の變化を攻究すれば足りる。新生産方法の採用にせよ、新機械の發明にせよ、新動力の發見にせよ、多數の人が數百年かに亘つて苦心した結晶であつて、一朝一夕に出來上つたものではない。其筋道を記述することは、餘りに煩はしいから、茲には唯結果のみに就いて説明する。

生産方法の進歩も之れを三つに分け得る、第一は作業方法の改善、第二は生産方法の改善、第三は新生産物の發見である。作業方法の改善は分業分勞の發達を中心とし、新機械、新動力の協助に待つ處が多であつた。生産方法の改善とは、例へば農

業に於いて灌漑施肥等の技術の發達した如きを指す。新生産物の發見は石炭からコークルター、染料等を抽出し、甜菜から砂糖を搾取する如きを言ふ。有史以前から此三つは並行して來たのであるが、近代に至つて其進歩の速度が、頗る迅速になり、百年以前に比べると、殆んど全生産界の面目を一新した觀がある。アダム、スミスは分業の例として止め針の製作を擧げてゐるが、斯様な單純な製作物に就いてすら、數十人の間に分業が行はれた。時計の如き複雑なものになると、其分業は更に多數の部門に分たれる。而かも更らに進むと機械で出來るものは成るべくそれを利用して、人手を省くようになる、即ち人と機械との分業が行はれるに至る。斯くて現代に於ける各國人の勞働能率は、其祖先に比して數十倍、數百倍に上り、各種の加工費はそれだけ低下してゐる。運輸や礦物採取等に就いても、略ほ同じ結果が現はれてゐるが、唯一つ動物の養成に就いて、天然の抵抗力が如何にも強く、左程著しい効果を擧げ得ない。

其處で原料の缺乏を補ふ手段として天然物利用の程度を高める工夫が凝されて、生産方法に新生産物とが發見された。古人が無價物として閑却してゐた水や空氣や廢物の中から、種々の有價物が抽出されて、それが間接直接に人類の生活を豊富にする資料となつてゐる。將來は恐らく海面の利用が重要な研究科目となり、其處から多くの富源が發見されるだらうと想ふ。

## (二) 新機械の發明

作業方法の進歩にも優して人類の生産力を増大させたものは、新機械の發明である。而して新機械の効果が特に著しく現はれたのは、それが蒸氣動力に結び付けられてから後の事である。通例近代機械工業の端緒は、英國に於ける紡績機械の發明にありとされるが、アークライトの綿紡機の發明は千七百六十一年の事で、カートライトの織

機發明は千八百八十年代の事である。而してワットの蒸氣機關が紡機に結び付けられたのは、千七百八十五年であるから、それを起點にして數へると、産業革命の發端から今日に至る期間は、僅かに百四十年に過ぎない。而かも現代に於いては、それが産業界を支配する最大勢力となつてゐる。牛馬の利用の如き、蒸氣力に比べると全く問題にならなくなつた。それが今では徐々に電氣動力に侵略されつゝあり、結局電氣力が産業界を支配する最大勢力となるに至つた。數千年來の歴史に於いて、之れほど急激な變化は曾て起つたことがないといふても差支あるまい。

一馬力が八人の力に相當するとして、三百萬馬力の動力が使はれてゐるとすれば、二千四百萬人の勞働者が働いてゐると同様である。是れが新動力採用の結果であるが、作業方法の進歩も新機械の發明も亦それ以上の効果を擧げてゐるとすれば、現時の産業界は實在人口に數十倍する勞力を利用してゐるわけである。生活が複雑になり

生産物が豊富になつたのは、當然であるが、同時にその反面には、色々の新現象が起り、人類全般の幸福が必ずしも増進してゐないといふ悲觀説も現はれて來た。果して然りやば、是れから研究せんとする主題である。

生産方法の進化に隨伴して起つた經濟上の問題は多種多様であつて、何處から着手すべきかに就いてすら迷ふ。差當つては産業革命が、人類の心身に及ぼした影響を述べるが順序であるが、それは餘り高遠な問題であつて、屢純正經濟學の範圍を超脱する處があるから、姑く物質的方面に限つて説明を進める。

### (三) 資本蓄積量の増大

通例世人は産業革命以後の經濟界を稱して、資本主義の時代と云ふ。新時代の最大特徴は過去に於ける勞力の結果たる資本をして、現存勞働者と競争させようとする處

に存する。農業時代に於ける最大の富は耕地と家畜とであつた、それも矢張過去の勞力の結晶に外ならず、而して地主の專横は當今の資本家よりも甚しかつた。勢力のある處必ず其濫用を伴ふ、優勝劣敗を基礎とする社會組織は人類の力が平等にならぬ限り、必ず此種の弊害を伴ふもので、其根本的消滅は到底實現されさうに想はれぬ。仍つて此問題は姑く保留するとして、唯單純な事實として、資本出現の徑路を述べよう。人類の經濟的活動は生存の維持向上と、種族の繁榮とを目的としてゐる。その目的を達する爲めには、將來の爲めに目前の愉樂を犠牲にせねばならぬ。其處から貯蓄といふ習慣が生れて來るが、それによつて未來の生活が豊富になるといふ確信なしには貯蓄をする氣にはならぬ。耕地の改良や家畜の養成は、報酬漸減の法則によつて制限されるので、無限に繰返して往くわけに往かぬ。斯くて貯蓄の習慣も自から抑制され富の増加率は遲鈍であつた。處で十九世紀になると、俄然新局面が展開され、新資本



の急速なる需要増加が、貯蓄の急増を促がした。

總ての社會現象は、それを構成する各個人の行爲の集合した結果である。而して各個人の行爲は、常に計算的根據によつて行はれるが、不知不識の間に社會の潮流に支配される。如何なる人物でもその勢力を超越した行動をするわけに往かぬ。十八世紀末以後の資本の集積は、總て個人の力によつて行はれたが、産業革命といふ社會的勢力なしには、實現さるべくもなかつたのである。産業革命は生産に伴ふ貯蓄、消費に伴ふ貯蓄とを、著しく増大させたのである。

他人に先驅して新機械を採用したものは、一時は多少の犠牲を拂ふたにもせよ、結局に於いて平均以上の利潤を収め得たが、而かも儲かれば儲かるほど、工場を擴張せねばならず、斯くて利潤の誘惑が盛んに貯蓄を行はせたのである。即ち貯蓄心が強かつたといふよりも、儲かる面白さに釣込まれて、事業を擴張したといふ方が適切である。

る。カーネギーの成功も、フォードの巨富も、此の如くにして實現されたのである。之れを稱して生産に伴へる貯蓄といふのは、決して間違ふ言表はし方ではあるまい然らば消費に伴ふ貯蓄は、どうして出來たかと言へば、新産業の出現によつて、耐久貨物の生産が激増して、旺んに其消費を奨励したからである。社會的消費即ち道路水道港灣提防運河學校等の築造は、其最も著しい例とすることが出来る、それは社會の共同的資本として、將來の生産を増大させる基本となつてゐる。

#### (四) 大組織産業の出現

機械が蒸氣力に結び付けられてから後、家庭に於ける小規模の工業は次第に大組織の工場工業に壓迫され、今や家庭工業は古代の遺物となつて了ふた觀がある。工場工業の發達は、(一)人口の都市集中、(二)農村の衰頹、(三)小資本工作者の漸減、(四)

資本家の専横等によつて、幾多の弊害を生じたのみならず、(五)労働者を機械に隷屬させて、其生存を脅威し、(六)婦女幼年者を男子に代用せしめて其心身を害し、(七)労働能率の急増によつて勞力の過剰を惹起し、(八)集團作業に伴ふ種々の弊を醸して労働問題發生の端緒を啓き、且つ(九)大事業家の政權利用から、労働者の對抗的團結を促がして、政争の新舞臺を展開せしめた。即ち労働能率の増進を圖つた點に於いて其効能は頗る顯著であつたが、それと相殺さるべき惡結果も、決して尠くなかつたのである。それ等の點に就ては、何れ後に詳説する機會あらんが、全體に於ける生活資料が豊富になつた爲めに、社會を構成する各個人の分け前が殖へたことは、承認せねばならぬ。問題を物質的方面にのみ限り、且つ各個人間に於ける幸不幸を別とすれば産業革命の人類生活に寄與した貢獻は頗る多大なりと言はねばならぬ。

上來記述した生産方法の改善は、總て最小の勞力を以つて最大の効果を擧げること

即ち勞力の節約を目的として行はれた。隨つて其結果は當然労働時間の短縮と、勞力強度の低下となるべきであるのに、實際は其正反對に労働時間は延長され、労働の強度は殆んど極點まで高められた。生活向上、種族繁榮の本能が、東洋式の消極的生活方法を、全然否定したものであつて、今や米國人は此積極主義の先頭に立つて活動し、徒らに物質上の優越を誇つてゐる。最近此潮流に對して、若干の反動的傾向がないでもないが、當分大勢を支配する力は持ち得まい。併し人類生存の目的が、唯物質慾の充足にのみ在らぬことは、何人も了解してゐる筈である。産業革命に對する公正なる批判は、此點から爲さるべきであるが、それは聊か經濟學の範圍を超脱するものであるから、姑く措く。

労働能率の増進が労働時間の延長と、労働強度の昂進とを促がした事實は、我國に於ける明治初年の實況と、現在のそれとを比較すれば、直ちに了解されることであつ

て吾々は父祖よりは餘計なものを消費する代りに、其差以上に餘計に働かねばならぬ。それは現在の生活状態を維持向上させる爲めには、次の時代により多くの遺産を残さねばならぬからである。

### (五) 機械と失業問題

機械工業の發達につれて、第一に起つた問題は、それが勞力の需要を減じて、失業者を多くするといふことであつた。處が實際は勞力の需要は益増加して、何處までも能率増進の工夫を凝らさねばならぬ状況である。勞力節約方法の發明が、各人に分配さるべき資財を豊富にしたのみならず、勞力の需要を減じなかつたといふことは、經濟學者の一般に承認する處であるが、それは數理上當然の事である。假りに我國に於いて、二千萬人の人が働いて、一ケ年に八十億圓の生産物を得てゐたのに、産業の進

化によつて、千五百萬人で同じ結果が得られるとする、五百萬人は餘る勤定である。その内二百萬人丈けが、その進化の行はれる間に新しい仕事を得たとする、之れが又十億七千萬圓の生産物を作り出す。全體の生産高が九十億七千萬圓になるから一人當りの分配額は、四百圓から四百五十三圓五十錢になる。斯くて國民一人當りの生産物の増加は、疑問の餘地なき處である。然らば他の三百萬人はどうなるか、人類の消費は貨物に限らず、他人の勤勞をも含む。隨て他人を使役する餘裕があれば、それを他人の勤勞購買に充てる、一人當りの生産物が豊富になることは、必然的に其餘裕の發生を意味する。斯くて他の三百萬人の勞力も需要さるべき機會に接する。經濟學上に於ける貨物とは、實は天然物に加へられた人の力を指すものである、而して勞力とはそれがまだ天然物に移されてゐないものを指す、貨物と勞力とは其本質に於いて同じ物である。富の増加が貨物の需要を増すといふことを、一層精確に言ひ表はせば、富

の増加は貨物に含まれてゐる勞力、及び人體に具有されてゐる勞力の需要を増加するといふことになる。生産と消費との根本に於ける不可分性から、勞働能率の向上は、勞力の需要を減少せずといふ原則が生れ出る。それにも拘らず現代に於いて失業問題の盛んに論議されるのは何故か、それは全く社會進化の過程に現はれる部分的齟齬であつて、各個人の利害と全社會のそれとは必ずしも一致しない。社會の進化は常に其犠牲者を生む、而してそれが次の進化の動機となる、此の如きは有史以來反覆された事であつて、産業界も其例外に立ち得ないのである。

## 第十章 産業進化の犠牲

### (一) 貧富の懸隔増大

産業進化の功德は、生活資料の増加即ち富力の増進となつて現はれる。新時代の國

民は其恩恵を被る。同時に、次の時代に對して更に多くの遺産を残さねばならぬ。而して此過程は私有財産制度の下に、利己心を刺戟することによつて行はれる。各個人の所有慾を基本とせぬならば、現に存在する如き資本の集積は行はれなかつたであらう。初期の英國經濟學者が、之れを出發點として經濟現象の説明を試みたのは洵に當然の事と言ふべきである。而かも現代に於ける各種の難問題は、其處から起つてゐる個人の所有慾が産業進化の基調となつてゐるから、自分の利益の爲めには、他人の苦痛を問題としない。斯くて現代の經濟界は財貨の爭奪が赤裸々に行はれる不斷の戰場である。寄附行爲や温情主義によつて、外觀を修飾してゐるものほど、此戰場に於ける勇敢なる闘士である。勇敢な闘士にあらざれば、寄附すべき資産も、温情主義を行ふ餘裕も、作り得ないのである。それ等不徹底な博愛主義は、經濟組織の根本に對しては、何等の變更をも加へない。經濟的人格としての行動は、飽まで利己的であるの

が、現代の經濟組織に適合してゐる。社會改革者として立たうとするならば、全然經濟人格としての考慮を棄てねばならぬ、兩者の間には越ゆるべからざる溝渠が横はつてゐる。

それは借て措き、産業革命の進行は、企業的天才をして縦横にその手腕を發揮させて、巨富集積の機會を得せしめた。何れの國にも百萬、千萬、一億を單位とする大富豪が輩出して、經濟戰爭の指揮に任じ、幾萬幾十萬の下士卒を驅使してゐる、一將功成つて萬骨枯る底の光景は到る處に展開されてゐる。その事の可否は別問題として、既に全參加員の運命を賭する戰爭である以上、對手に勝つことを以つて、共同の目的とせねばならぬ。それが總ての生産者に課せられた使命であり、その意味を自覺してゐるものにして、初めて眞の闘士となり得る。

新時代の要求に順應して、經濟戰爭の指揮者となつたもの、成功が花々しかつた丈

け、時勢に遅くれた人々の運命は悲惨であつた。斯くて一人の大富豪の出現は數百人の無産者を作り出した。當今に於ける工場労働者の位地を以つて、古代の農民に比ぶれば境遇が悪くなつたとは云へまいが、獨立自營の生活をしてゐた人々の社會的位地が、著しく低下したことは疑問の餘地なく、小地主や舊式工業者の大半は進化の犠牲に供せられたのである。近代社會組織の弱點は、それ等中流階級の衰頹であるが、國富増進率の著しい國にあつては、大産業組織の内に新中産階級の出現を見つゝある。現代の經濟戰爭に於ける勝敗の運命を支配するものは、それ等の新階級でなければならぬ。工場主任、職工監督、販賣主任、仕入係長等は即ちそれであつて、軍隊に於ける尉官や下士に該當する。それ等の位地に適材が配置されるれば、其事業は成功する。

## (二) 新發明の犠牲

新機械の採用は舊機械の効率減退を意味する、新機械の採用が其使用者の能率を増すと同時に、それによつて生産さるゝもの、生産費を引下げるからである。随つて新機械が出現すると共に、舊機械の使用は停止するのが得策である。けれど使用の停止はその價値の廢減を意味する、換言すればそれに含まれてゐる資本の放棄を意味するそれは所有者にとつて忍び難い處であるから、出来る丈け長く同一機械を利用しようとする。斯かる傾向は大組織産業に於いて特に著しいが、個人企業にも同様の事實が現はれる。例へば電力精米機が發明されても、新しい水車の所有者は、直ちに新機械を採用しようとはせぬ。此の如くにして既投資本の放棄は免れ得るが、それと同時に新機械利用者との競争に於いて、不利の地位に立つ。總ての機械の發明は數年又は數十年の間に、徐々に改良されながら完成の域に達する。それが爲めに同一時代に使用されてゐる生産用具の能率には、數十等又は數百等の階級がある。日本郵船會社の所

有船の船齡が、一年乃至五十年近いものまでに分布されてゐるようになり、東京電燈會社の發電機は明治中年から最新式の分までである。全部最新式の設備を持つてゐるといふ如き會社は、有り得ないと言ふても差支ない。それは機械に就いてのみならず、人に就いても言へる事である。斯くて同時代に於ける各生産者の能率は、決して平等であり得ない。此不平等から利潤が生れて來る、利潤を收めてゐるもの、ある反面には、損をしてゐるもの、存在が承認されねばならぬ。表面上收支の辻褄は合ふてゐるにしても詳しく調べて往くと、何處かに缺陷が生じてゐるのである。此事實は各種の事業會社に就いて比較研究をして見ると能く判ることだが、それ等は計算が明白に出来るから、長い間不利な生産を繼續する場合が尠い。時代後れの個人事業に在つては、次第く生活に壓迫されて來て、不知不識の間に從來の貯蓄を食込み、結局無産者の群に墜ちるものが尠くない。小工業家や、小地主の如きは其顯著なる實例で、商人に

失敗者の少いのは、固定資本の所要額が少いからである。それでも販賣組織の變遷や人口の移動によつて、打撃を被るものが少くない。

既投資本の放棄を免かれる爲めに、舊式生産方法を繼續する損失が餘り多額でない場合には、借金をして新機械を購入するには當らないわけだが、併し新機械の利用者に比して、それだけ不利な位地に立つことは避け難い。それが爲めに往々使用人を虐待するような事が起る、例へば紡績女工の食料を粗悪にするとか、船員を老朽船に乗込ませるとか、礦夫を危険な礦區に働かせる如き、世間並の給料を支拂ひつゝも、労働者の氣が着かぬ處で瞞着手段を行ふてゐるのである。生産能率が平等であり得ない以上、總ての點に於いて公平を期することは困難である。

### (三) 衛生上の惡結果

産業革命の理想は、積極的に生活資料を豊富にすることであつた、随つて消極的方面たる労働者の心身の勞苦を輕易にする點に就いては、殆んど注意されなかつた。斯くて機械工業の最高度に發達せる米國に於いては、壯年の労働者の勞役は緊張の極點に達し、丁度我國の力士なきのよう四十歳を過ぐれば、老衰者の仲間入りをせねばならず、それ以前に老後の計を爲さざりしものは、産業界の敗殘者となる。他の一面には機械の發明が勞力の輕減を來した場合もあるが、その結果は婦女や少年を壯年男工に代らしめて、壯年男子の過度の勞働よりも、遙かに悪い結果を生じてゐる。蓋し幼女や少年は、新時代を繼承する芽生であつて、まだ成熟せざるに先ちて、それを勞役することは、健全なる發育を阻礙する。況んや空氣の流通不良にして、日光の放射不十分なる工場區内に、集團的生活を営ましむるに於いて、其心身の發育を害すべきは説明するまでもない事である。人間は同類相食むのを以て、最も野蠻な風習として

るるが、近代の工場に在つては、双互契約の美名の下に、他人の壽命を縮めて、自己の生活慾を満してゐるものがある。それ等幼年工を雇傭することは、その家族の窮乏を救ふ唯一の途かも知れぬが、社會全體から見て健康不良な後繼者の續出は、決して喜ぶべき事態ではない。されば工場工業の過度に發達せる國にあつては、工場法其他の規定によつて其害毒を豫防しようとしてゐる。

尙ほ又機械工業に在つては、労働者は全然自己の發意によつて働く機會を失ひ、數時間に亘つて無趣味な仕事を反復しなければならぬ。それは營に身體の疲勞を加重するのみならず、併せて精神上的の愉樂を奪ひ去つて、勞作に對する愛着心を失はしめる其處で仕事と享樂との區分が極めて明白になり、労働時間短縮の要求が、頗る切實になつて來る。近代労働問題發生の起因は、實に此處に存し、人道上から見て輕視し難い新現象である。且又之れに關聯して工作上に於ける個人的熟練の價值が低下したこ

とも、舊式機械の廢滅と同じ意味で、その所有者の損失となつた。

社會の進歩がそれを構成する個人の幸福を、阻礙する筈はないのであるが、部分的に見て往くと、成功者と失敗者との區分が、如何にも明白であつて、同情に堪へない事實が頻出してゐる、併し敗殘者の救済は政治家の考慮すべき領域であつて、純粹の經濟行爲は飽くまで利己的ではなくてはならぬ。然らざれば他人に同情するが爲めに、自己の存立を危ふする。家族の維持に困らぬほどの資産を持つてゐても、苟くも事業を經營してゐる以上、少しでも經濟競争に對する準備を怠れば、忽ち敗殘者となる。

#### (四) 經濟學者に對する非難

生産能率の増進は、その反面に於いて労働者の心身傷害、並びに時勢後くれの生産者の敗殘といふ、絶大の犠牲を要求する。之に於いてか、社會改革論者や人道主義者



や進歩的政治家の中には、富の増進を唯一の目標とする經濟學者に對して、盛んに非難の聲を擧げるものがある。それは洵に至當の事だと考へるが、併し所謂正統派經濟學者でも、決して産業革命の暗黒面を忘れてゐるのではない。唯經濟行爲の根元は、最少の勞力を以つて最大の効果を擧げる一點に歸着するから、他の方面は姑く政治家宗教家に一任して、専心經濟上の原則を探究するに努力したまでである。將た又經濟學發達の初期が、國民競争の最も激烈な時代に合致し、今も尙ほ同一の傾向が繼續してゐる爲めに、國家としての優越を期する上に於いて、國民全體の實力増進を第一位に置き、各個人の利害を、第二位に置いたことも、洵に已むを得ない成行であつた。それを評して資本家本位の經濟學と稱するのは、聊か苛酷に失する。國民對立の觀念が餘りに強く、人道主義を高調する氣分を減殺したのであつて、唯生産能率の増進のみが、人類の幸福だと考へたわけではあるまい。多數の經濟學者が分配問題に就いて

盛んに考慮してゐるのは、その一證とすることが出来る。

經濟學と政治學と、社會學と、倫理學とは、相互密接の關係を有し、その一つを切り離すことは、不自然と云はねばならぬ。乍去總てを混同して了へば、單一の目的に向つて、徹底的に研究を進めて往くことが、出来難くなる。隨つて經濟學に於いては、矢張り富の増殖を唯一の目標として、他の問題は第二位に置く外はないのである。

## 第十一章 資本集中の傾向

### (一) 生産規模の擴大

機械と動力との結合は、大規模生産の利益を増大し、資本集中の傾向を促進した。斯くて革命の初期に於いては、資本の所有者に非ざれば、新式産業の經營者となり得ない狀況であつた。而してそれ等の資本家は、群小生産者を壓倒して、巨多の利潤を

收め得た爲めに、富者は益富み、貧者は益貧する如き外觀を呈した。詳しく各國富豪の歴史を調べたならば、其成功の基礎は企業的才能の優越にあつたことを知り得るであらうが、何分にも産業界の變化が急速で、資本の需要が旺盛であつた爲めに、表面には資本萬能の形が現はれたのである。而かも其時代は極めて短少であり、間もなく金利低下の傾向を生ずると同時に、企業才能の價値が一般に承認さるゝに至つた。米國に於ける大富豪の大半は、皆企業的天才であつて、父祖の遺産を繼承したものは極めて少數に過ぎない。

現代に於ける勞働爭議を以つて、資本と勞力との争闘といふのは、資本萬能の外觀に欺かれた謬見であつて、實は企業家對勞働者の争である。此區分を力説するのは、資本は企業家の道具であると同時に、勞働者の味方であつて、双方ともにそれを尊重せねば、自己の存立を危ふするものだからである。資本家と企業家との區分が、明確

になつて來たのは、株式企業の發達と金融市場の進歩に負ふ處が多い。當今では一株の株主でも、一圓の貯金者でも、皆資本家を兼ねてゐる。苟くも貯蓄のあるものは、總て資本家となる資格を具へてゐる、而かもそれによつて勞働者を驅使する力は持ち得ない。若干の資本を集めて、一個の事業を經營するとき、その人は初めて産業界の主將として、經濟戰を指導する重任を負ふ。金融組織の不備な時代には、薄資者は主將となる機會を與へられなかつた、其處から企業家と資本家の混同が生じたのである。歴史的に云へば近代式銀行の發生も、共同出資事業の出現も、産業革命よりは早かつたのであるが、大組織産業の發達は、それ等の發育を促進して、遂に當今の全盛を見るに至つたのである。而してそれに伴れて、薄資者が經濟戰の主將となる機會が與へられた。

## (二) 金融市場の發達

歐洲に於ける銀行の起源は、戰亂等の場合に於ける掠奪を避ける手段としての、貴金屬等の保護預から初まつたと傳へられる。中央政府が確立して内亂が次第に跡を絶つに至り、保護預けの必要は減少し、資金の運用を目的とする預金が取扱はれ、遂に現今の銀行が生れたのである。各國政府は財政運用の都合上、それを奨励し、相次いで中央銀行を創設するに至り、金融機關は略ぼ完備の域に達した。此の如くにして貯蓄の死藏が避けられたことは、遊民の減少と同様に、生産の増進を助けたのである。公債や株式の出現が、銀行の發達に負ふ處多かりしは言ふまでもない。

經濟界の各部分は相互に密接に相關聯してをり、その一つを切離しても不具になる産業革命といふ一つの幹に、貿易の發達も、金融機關の完備も、人口の移動も、皆密

接に結び付けられてゐる。斯くて當今では全世界の經濟界が、無數の細胞から成立つてゐる有機體と見做さるゝようになった。

而して金融機關は血液の循環を司る心臓の如き重要な位地を占めてゐる。斯くて此心臓の強弱が經濟界の健康を支配する原動力となるに至つたのである。

金融機關の實際的作用に就いては、後に詳しく説明する場合あらんが、差當つてはそれが利子低下の一大原因を成したことを述べねばならぬ。金錢貸借は古代から行はれてをり、其條件は借方にとつて頗る不利であつた、之れは債務の履行が不確實であつた爲めでもあるが、主因は貸手の範圍が狭く、資金供給の競争が行はれなかつたのに在る。銀行の發達は、借方をして條件撰擇の自由を得せしめ、不當な要求を拒否する機會を與へて、利率を低下せしめたのである。それと同時に貯蓄が銀行の手によつて安全に保管されるに至つた事實は、貯蓄獎勵の作用を成して、資金の供給を豊富に

し、益以つて金利の低下を促がし而してそれが機械の改善、新動力の發見と結合するや、益々企業單位を大規模にしたが、それにも拘らず企業才能の卓越せる者は、他人の資金を利用して、産業界の主將となる機會を與へられた。現代に於いては無用に死藏されてゐる貯蓄は、殆んど絶無に近いた。此の如く貯蓄利用の習慣が、高度に發達したことは、大に生産力の増大を促がしたが、それと同時に餘りに資本の活用を心懸ける結果として、信用濫與の弊を生じて、恐慌頻發の機縁を作り出した。此點に就いては、何れ經濟界の循環的變動を説く場合に、詳説するであらう。

### (三) 金利低下の傾向

十九世紀末から二十世紀初へかけて、多くの學者は金利は社會の進歩につれて、漸落の傾向を示すものと信じてゐた。之れは主として純粹の金利と、貸借に伴ふ危険の

保證料とを、混同した謬見に基くものである。社會の進歩は貸借に伴ふ危険と失費とを軽減し、その結果として利子歩合を低下させた。現代の利率が古代に比して著しく低廉なのは、それが爲めであつて、他の反面現代に於いては、利子のつかない貯蓄といふものが、絶無に近づいてゐる。社會全體の貯蓄高に割當て、見たならば、貯蓄者の取り分は昔の方が少かつたかも知れぬ。

實用經濟學講話の第二卷に述べてある如く、利子歩合は其社會に於ける生産増加率に比例するのを原則とする、随つて人口の増加率高く、産業界の變動の急速であつた産業革命の進行期が、理論上最も利子歩合の高かつた時代でなければならぬ。唯當時は社會の秩序が漸く確定せんとする時期であつたから、それ以前に比して、金利が低下した如き、外觀を呈したのである。産業革命が完成に近くにつれて、利率は次第に低下して來て、英國整理公債の利廻を、二朱近くまで降らしめた、金利漸落説の最も

優勢であつたのは、實に此時代である。

併し此時代に於いても、眼を轉じて歐洲以外の天地を見たならば、大抵の國で五六朱の利率が普通であつたことを發見したであらう。米國はまだ當今の如き債權國に轉化してをらず、南米や東洋では新耕作地の開拓と、新式工業の發達の爲めに、巨多の資本を要し、貸方さへ承諾すれば、無限に外資を需要する狀況であつた。自然英獨佛白等の先進國の資本家は、頼りに新開國に放資して、自國內に於ける金利の低下を緩和させた。此形勢に一轉機を與へたものは、南阿戰爭以後に於ける世界的戰禍の頻發であり、而かも米國をして債權國の位地に上らしめたものは、最後の歐洲戰爭であつた。十九世紀後半に於ける金利低下の傾向は、南阿戰爭を一轉機として、一應終局を告げたのである。

#### (四) 歐洲戰爭の經濟的原因

如何なる場合に於いても、戰爭の根本動機となるものは、經濟的利害の衝突である之れは古來より今に至るまで、少しも變らない法則である。併し今度の歐洲戰爭ほどその意味が露骨に現はれたことは尠いであらう。歐洲一等國の金利が二朱臺に落ちたことは、國民的發達の餘地が次第に收縮したことを意味する、産業進化の速度は遅鈍になり、人口の増加は制限されようとした。此局面を打開せんが爲めに新領土の獲得と新販路の開拓が試みられ、到る處に利害の衝突が起つた。此經濟的戰爭に於ける當面の敵手は、英國と獨逸とであり、而かも獨逸はバルガン及び佛伊白等を蹂躪して、英國打破の目的を達しようとしたので、世界的大戰爭の幕が切つて落され、十九世紀後半に於ける巨大なる富の蓄積は、その目的を達する資本として濫費され、再び高金

利時代を現出せしめた。各國の政治家が此真相を理解してゐたかどうかは疑問であるが、結局に於いては、其目的は達せられず、却つて反對の結果を惹起して、米國をして漁夫の利を得せしめた。但し歐洲交戦國に在つても、適者生存の法則が短期間に高度に實現する機會は作られたのである。國民的對立を基本としてゐる現代の經濟生活に於いて、此種の濫費は今後も亦繰返されるであらう。平時に於ける軍事費の支出の如きも、濫費の科目に加算さるべきものである。

金利の低下が生産物増加率の低下を反映するものであるとせば、それは必ずしも歓迎すべき現象ではあるまい。乍去社會も亦個人と同様に老ゆるにつれて成長率の減退するを免れない。此意味に於いて、百年二百年の長期に亘つて言へば、金利は漸落の傾向を續くるものと見て差支あるまい。唯十九世紀末の如く一部の先進國に於いて急に金利の低下する場合には、往々人口増加率との不釣合を惹起し、國外發展の野心を

助長して、戦争突發の危機を作り出す。現代に於ける人類の理性は、まだ此種の濫費を避けしむる程度まで、發達してゐないのである。

### (五) 市場獨占の企圖

企業單位の増大するに随つて、同業者間の競争は激甚の度を加へる、相互の競争力が強くなると共に、對手を倒すことによつて享ける利益の誘惑が増長するからである。併し双方の力が高まるにつれて、競争が激しくなることは戦争の場合と同じである。其處で大會社と大會社とが合同して、他の小會社を壓倒する場合の利益が考慮されるようになる。然うすることによつて、新會社は市場の大半を獨占することが出來得るであらう。此誘惑は各國に於ける多くの企業家をして、事業合同を行はしめ數億圓又は數十億圓の資本を擁する大會社を出現せしめた。米國に於けるトラストは、其最も

著しい例であつて、有名な米國鋼鐵會社の資本金は、十一億弗、積立金や社外債務を合算すると、全放資額は二十億弗を越へるであらう。

事業の合同統一は平面的に行はれるばかりでなく、立體的にも行はれる。立體的に云ふのは、原料採取の初期から製品販賣の最終に至るまでの事業を一會社に纏めて了ふことで、歐米の大製鐵會社などは、概ね探礦から製作までの總ての仕事をしてゐるのみか、燃料たる石炭の採掘や、原料製品の運搬までを兼營してゐる。我國でも製紙會社の如きは、造林事業から直接販賣までの總ての過程を一手に收めてゐる。斯様にすれば補助的事業の經營者に、利益を分たずに濟むが、餘程大規模の會社でなければ採算上實行し難い。

平面的統一即ち多數同業者の合同は、(一)相互間の競争の失費を省略し、(二)事務所や従業員を節約し、(三)最高度の分業を實行し、(四)信用を増加し、(五)他會社に對する競争力を強め、(六)原料仕入れや製品販賣に就いても便宜を増す。随つて市場を獨占して、思ふ様に製品市價を支配するに至らずとも、小會社分立の際よりは、利益を増す。併し市場を獨占し得れば、一層其利益が増大するので、動もすればそれを計畫する、米國のスタンダード石油會社の如きは、殆んど其目的を達せんとした。而かも之れを消費者側から見れば、一つの會社に市場を獨占されるときは、不當な市價を強要される危険が多いので、米國民はス社の專横に反抗し、之れが動機となつてトラスト取締法が制定された。

假りにトラスト取締法の如きものが無くとも、市場獨占計畫は容易に成功するものでない。蓋し獨占會社が少しでも不當に製品市價を引上げれば、忽ち新しい競争者を出現させて獨占状態を打破させるからである。唯鐵道瓦斯電燈の如く、法律又は事業の性質によつて獨占的地位を占め得るものは、國法によつて取締る必要がある。殊に

鐵道運賃の規定の如きは、經濟界の全體に重大な關係を持つものであるから、何れの國に在つても、法律又は行政上の監督を受けてゐる。

## 第十一章 貨幣價値の漸落

### (一) 通貨漸増の傾向

各國經濟界の趨勢的變化の中で、從來世人の餘り注意しなかつたもので、而かも頗る重要な一現象がある、それは即ち貨幣價値漸落の傾向に外ならぬ。之れが列國の産業革命を進行させる上にも、多大の刺戟となつたことは、疑問の餘地なき處である。蓋し貨幣の下落は物價の騰貴を意味し、勿價の騰貴は企業利潤を増加させ、企業利潤の増加は新企業を刺戟するからである。中世紀以後に於ける歐洲の物價は、千八百七十年代初まで、概して漸騰の一途を辿り、十九世紀の物價を十五世紀のそれに比べる

と、約十倍になつてゐるらしい。勿論正當に比較し得るものは、重要食料品のみであり、而して食料品は一般工作品などよりも、漸騰する傾向の強いものゆへ、右の例を以つて、貴金屬の市價が低落したとは云へぬが、理論上からも貨幣價値の漸落は、免れ難い運命だと云ふことが出来る。我國に於ける過去六十年間の歴史は、その最も著しい例とすることが出来る。

産業革命と並行して、採礦冶金の技術も、長足の進歩を遂げた。唯此一點から云ふても、貴金屬の價値は低落すべき筈である、而かも其最大の需要は貨幣原料として、あるから、他の礦物の如く消耗されず、大半は經濟界に流通しつゝ、蓄積されて行く。此點から云ふても、貴金屬價値は漸落すべき筈である。況んや新大陸の發見以來金銀の産額は著増し、殊に南阿金礦の開發によつて、俄然倍加の勢を示せるおや。單に貴金屬の供給狀況のみから見ても、通貨の世界的増量は、當然の事態であつた。



而かも其上に人爲的に通貨を増發させる工夫が加へられた、其第一は銀行の發達による通貨死藏の減少である、第二は各國に於ける紙幣の利用である、第三は信用の發達に伴ふ手形の利用である、第四は補助貨の増發である。第五は帳簿決済による通貨使用の省略である、凡そ是れ等の事實は、何れも貨幣價值の低落を促さすものであるが、現代に在つては手形の利用が特に重要視され、それに預金通貨といふ名稱を與ふるに至つた。此の如くにして貨幣の價值は頻りに低下し、其差額が純粹の企業利潤と混同されて、一面には資本蓄積の原因となり、反面には企業刺戟の作用を起した。若し此刺戟がなかつたならば、産業革命の進行も、大分に遲滯したであらう。

## (二) 財政上の必要

右の如く通貨は自然的に増加すべき運命を持つてゐるが、若しも各國の政府がそれ

を抑制する意圖を示したならば、今日の如き激増は起らなかつたであらう。處が十八世紀後半以後、米國は南北戦争の爲めに、歐洲はナポレオン戦争其他の大戦役の爲めに財政處理の都合上、盛んに通貨の増量を奨勵した如き結果を生じた。曩きにも述べた如く、政府が公債を増發し、納税の苦痛を増大せしめるので、假りに其弊害を認めたるたとしても、積極的に通貨分量を制限するを欲しなかつた。斯くて政府も亦自然の趨勢を助成して、通貨増量を促進させたのである。

我國に在つては明治初年には金四分を一圓としたのを、後には金銀複本位にして、事實上低落せる銀貨を、本位貨たらしめ、明治三十年には遂に二分を一圓とする金本位を採用し、その後二度まで保證準備發行制限額を増加し、日露戦後には外債其他の方法によつて、通貨の收縮を阻むに至つた。此の如き政策の反覆により、最近に於ける我國の物價は明治初年に比し、尠くも五七倍の高位を保つてゐる。明治以前に比す

れば尙ほ遙かに高くなつてゐる。歐洲諸國に在つても、過般の大戦の結果として、大抵の國の貨幣價值が、戦前に比し半額以下に降つてゐる。最近に於ける英國の物價すら、戦前に比すれば二倍近くに該當する。

近代社會の一の傾向として、政府の手に委ねらるゝ事業の範圍が、著しく擴大したことを擧ぐるのには、何人も異論があるまい。共同生活の意識が強くなるにつれて、此傾向は益助長されるに相違ない。而かも政府事業が擴張されるればされるほど、公債によつて經營される仕事が増へる。公債の現存額が増へるにつれて、貨幣價值の騰貴は回避される。随つて貨幣漸落の傾向は、今後も恐らく已む時があるまい。

### (二) 貨幣下落の影響

現代の經濟生活は貨幣を中心にして行はれてゐる、それが好い事か悪い事かは別問

題として、此中心事實から色々重大な結果が産み出された。就中重要なのは、効用價值と交換價值の分岐であるが、此問題を詳しく論究するのは、本書の目的でないから姑く措くとして、此處には主として貨幣價值の下落から生ずる種々の現象に就いて一應説明することにしよう。

貨幣價值下落の影響は、最も強く利潤の上に現はれる。貨幣の下落によつて物價の騰貴する間、總ての貨物は生産原價よりも高く賣れる、随つて其差丈けが利潤として残る。本來利潤は或る生産者が他の同業者よりも、低廉に生産し得る場合のみ發生するものであるのに、此場合には水準以下に在る生産者すら利潤を收める。之れは全く總ての收支計算並びに契約が、貨幣によつて行はれる結果に外ならない。總ての貨物が一律一體に騰貴したと假定すれば、物と物との交換割合に變化は起らないから、利潤増加の餘地も生じない。而かも物價の騰貴が利潤を増大させるといふのは、資本動

定が貨幣によつて行はれ、労働報酬が貨幣によつて契約されるからである。

現代の企業家は大体に於いて他人の資本を利用してゐるのを通例とする、即ち巨大な債務者である。而して貨幣価値の低下は、債務者を保護するものであるから、それにつれて利益を享くるのは當然である。貨幣価値が半減すれば、千萬圓の債務は五百萬圓になる、即ち百萬圓の利子は従前に於ける五十萬圓に相當する貨物で支拂ふことが出来る。株式組織に在つては、利潤の増加につれて配當を増さねばならぬが、貨幣が半價になれば、一割の配當を二割にすることが出来る。株主の實質的所得はそれによつて増加しはせぬが、貨幣計算では増加するゆへ、資産が増加したもの、よつて考へる。

賃銀給料の取得者は、貨幣価値の低下する際には、常に損失を被る、契約が金錢單位で行はれるゆへに、物價が上れば上るほど、實質的収入は減少する。勿論それにつ

れて賃銀給料も高められて往くが、其間に時間上の相違が起り、且つ其上進率は到底物價の騰貴率に及ばない。斯くて當然労働者の手に歸屬すべき収入が、利潤として企業家に奪取される。其分量を統計的に表示することは困難であるが、過去六十年間に日本の労働者の損失した額丈けでも、驚くべき巨額に上るであらう。勿論時としては貨幣価値の反動的騰貴によつて、企業家の損をする場合もあるが、大勢が漸落の傾向を示してゐる以上、差引して労働者の損失の方が遙かに大きいのである。

#### (四) 資本収入の漸減

貨幣価値の低下によつて、最大の損失を蒙るものは、純粹の資本家即ち資本の貸方である。株式會社の株主は、企業家の領域に一步踏込んだものであるから、姑く別問題として、公社債の應募者や、保険契約者や、据置き貯金の契約者の如きは、皆其中

に包含さる。是れ等の人々の蓄積は、總て貨幣になつてゐるから、如何に物價が騰貴しても、契約した元利金の支拂を受くるに止まり、其購買力の減少してゐるだけ、實質上の損害を被つてゐるのである。日清戦争の際に十萬圓の公債に應募して、其利子で生活してゐる家族がありとせば、其生活の内容は今では當初の三分の一以下に低下してゐるであらう。その頃三十年満期の保険契約をしたものは、掛金の半額以下の支拂しかされない勘定になる。此の如き事實に對して、何等の不平も起らないのは、全く不思議である。

併し他の反面から見ると、我國に於ける株式企業の参加者も亦多くの個人營業者に比べると、決して安全有利な立場には置かれてゐなかつた。之れには色々の理由があるが、最も重要なのは我國の企業家の多くが、企業的才能を缺き、徒らに歐米の同業者を模倣するに止まつたことである。累次の貨幣價值低下に拘らず、各種株式會社の

平均利潤は、決して高かつたとは言へない、經營の仕方が悪かつたからである。けれど利潤の少かつた他の一因として、多くの會社が絶えず高金利に苦しめられた事實を擧げることが出来る。貨幣價值の低下は新企業を刺戟して、資本の需要を増加する一面、貸方の實質的收入を減少せしめるが故に、名目上の利率は騰貴する。此種の利率の騰貴は、貨幣購買力の低下に隨伴するものであつて、本質的利子歩合の騰貴とは區分せねばならぬ。十九世紀末以後に於ける世界的金利の騰貴にも、同じような原因が働いてゐる。是れ等の異分子を排除して見れば、利子低下の傾向は相變らず繼續してゐるのかも知れぬ。

### (五) 資産評價の増大

貨幣價值低下の最も普遍的な影響は、それによつて各種資産の評價が増大する、

である。十九世紀に於ける列國の國富増進の一面には、單純に評價が高まつた結果が多分に含まれてゐるのである。最近の我國に於いて、其傾向の特に強かつたことは、言ふまでもあるまい。此種の評價増は貸主に損害を與へて、債務者を援護する、随つてそれによつて金利の負擔が、實質上に於いては、著しく輕減されてゐるわけである多くの企業者は自己の誤算から、好況時代に資力不相應の擴張計畫を立て、高利の貸借契約を強要され、屢破綻の悲運に遭遇するが、貨幣價值の低下するときには、豫期せざる利益を收める、是れ等の點に就いては、何れ經濟界の循環的變動を説明する際に、詳説する機會があるであらう。

貨幣漸落の結果が最も好く現はれてゐるのは、地價騰貴の傾向である。市街宅地價が人口の移動と、交通機關の發達につれて漸騰するのは、各國ともに同様であるが、我國に於ける田畠地價の漸騰は、主として貨幣漸落による穀物騰貴の結果である。米

價は明治初年に比し十倍近くになつてゐるから、田地が十倍に騰貴してゐても、少しも、不思議はない。それ以上に田地が騰貴してゐるとせば、それは耕境の低下に由るのであるが、臺灣米や外米の輸入と、各種肥料の輸入とに抑へられて、耕作地積の増加は左程著しくない。

我國に於ける土地利廻歩合は、公債より低率であつて、四朱内外を普通としてゐる之れは貨幣漸落の傾向によつて、地價が年々騰貴する事實が、大分に影響してゐるのである。眞の放資利率の標準は、矢張り公債の方に近いであらう、即ち五分から六分餘の間である。但し公債は土地と反對に漸落の傾向を示してゐる爲に、其利廻歩合には純粹の利率以外、幾分貨幣下落に對する保險料が含まれてゐる。明治初以來の我國ほぎ、金錢債權者の損害を被つた例は尠いであらう。金利が他國よりも高い一因は、其處に在る。

## 第十三章 労働問題の真相

### (一) 労働問題の両面

機械工業の發達は生産者と土地との關係を引離し、工業中心地帯に於いて、集團的生活を營ましめる。此事實を起點として、色々の新現象が起るが、就中重要視されるのは、所謂労働問題である。一般に労働問題と稱するもの、中には、純粹の經濟問題即ち賃銀契約に關する紛議と社會問題即ち保健、教育、失業、能力喪失者救濟等の事項とが含まれる。世人が此二つを混同するのは、非常な間違であつて、前者は當事者双互間の事件であり、後者は社會全體の利害を標準にして、解決せねばならぬ事柄である。

凡そ經濟上の報酬即ち利子、地代、賃銀及企業利潤等は、本來その生産力に比例し

て分配さるべきであり、生産力の認定は需要と供給との自由競争によつて行はれるわけであるが、企業家と労働者とは、産業界に於いて、治者と被治者との關係に立つ結果として、往々にして契約の公正が、権力によつて蹂躪される。其處で被治者が團結して、其統率者たる企業家に反抗する場合が生ずる。要するに企業家と労働者との間に於ける需給の對抗は、表面上は何等の拘束を受けてゐなくとも、一度雇傭契約が行はれると同時に、勞力移轉に伴ふ失費が多い關係上、被傭者は忽ち競争者たる位地を奪はれ、企業者の意思によつて、不當然待遇を受ける機會を生ずるのである。

例へば物價騰貴の場合等に就いて見れば、其關係は極めて明白に表はれる。物價が騰貴すれば、事業收益が殖へるといふことは、一般に承認されてゐる、之れは安値で仕入れた原料が高く賣れる爲めもあるが、イマ一つは前通りの賃銀で作つたものを高く賣るからである。物價が高くなれば生活費が嵩むから、従前の賃銀では労働者の生

活は悪くなるが、契約に拘束されてゐる關係上、一般的に賃銀標準が高まるまでは、容易にそれを上げて貰へない。而かも賃銀標準が一般的に高まるのは、收益増加に伴ふ新企業の勃興によつて、失業者が收容された後とか、熟練工の缺乏を感ずるに至つた後でなければならぬ。斯くて貨幣價值の低下する毎に、労働者は或る期間不當の契約に縛られる。その不當を憤つて、その工場を去るとせんか、居住移動の失費、若干の失業期間、並に勤続年限の利益を犠牲にせねばならぬ。それよりも寧ろ不當な契約に甘んじてゐる方が、有利な場合が多いのである。

物價が下落する場合に於いては雇主が同様の損をするといふかも知れぬが、其弊には企業家は任意に高給者を解雇するとか、労働強度を高めるとか、低率賃銀労働者を以つて、缺員を補充するとか、工場の一部を閉鎖するとかいふ便宜があつて、割合に早く物價と賃銀との權衡を、回復することが出来る。假りに然らずとするも、貨幣價

値が漸落の傾向を示すものである以上、労働者の損をする場合の方が、遙かに多いと言はねばならぬ。

## (二) 事業收益と賃銀

世間一般に唱へられる所謂労働爭議なるものは、概ね労働問題の社會的半面ではなくして、その經濟的部分である、換言すれば賃銀契約不公正に關する爭議である。随つて公安を害さない程度に於いては、その解決は双方の當事者に一任して、政府又は局外者は成るべく傍觀の位地に立つのを妥當とするが、解決の手段として仲裁を試むることは、決して悪い事ではない。併し仲裁をするに當つては、必ず賃銀決定の經濟的原則に依據して公正な裁斷を下さねばならぬ。賃銀決定の唯一標準は、労働者の生産能力から、社會的標準利率を差引いたものである。而かも特定労働者の能率に就い

て云へば、其使役さるゝ工場企業組織の優劣によつて、甚しく相違する。例へばその時の社會的平準に於いて、一日三圓の生産能力を持つものでも、時勢遅れの設備しか持たぬ工場で働けば、二圓の生産しか出来ない。其場合一日一圓の差は、企業損失に計上さるべきものであり、之れに反して一日四圓の生産能力を發揮し得るならば、それは企業利得として計上されねばならぬ。賃銀問題の裁斷は、勞力の標準能力を基本として行ふべきであつて、會社が儲からぬから、低率に甘んぜよ、儲かつてゐるから、賃銀を引上げよといふ如きは、明かに不當である。

一部の經濟學者は會社が立往かぬ程度までの賃銀引上げを要求するのは、勞働者の自殺的行爲だといふ。それは企業家の無能又は誤算を、全然看過してゐる議論であつて、勞働者をして庸劣なる企業家の犠牲たらしめんとするものである。試みに我國に於ける多くの事業會社を見よ、時勢遅くれの設備は到る處に散在し、理論能力の四五

割しか運轉してゐない工場は、數へ切れぬほどある。是れ等の工場に雇はれてゐる勞働者は當然發揮し得べき能力を減殺されてゐるのである。それを標準にして賃銀を決められては、堪つたものではない。

勞力の移轉が如何に困難なるにもせよ、長く標準賃銀以下で働くものはない、それ故時勢遅くれの工場でも、表面上は世間並の賃銀を契約するが、苦しまぎれに食料を悪くするとか、時間を延長するとか、衛生設備を缺くとかする、其處に勞働爭議の起る誘因が存する。企業家にして公正の道を履んでをれば、勞働者を喰物にする煽動家も、乘すべき機會を得難いであらう。

### (三) 劣等工場の閉鎖

勞働者の要求によつて 現存工場が立往かなくなり、それが閉鎖される場合には、



それだけ労力の需要を減少せしめて、労働者も損をするといふ説は、一見頗る道理であるらしいが、實は無能企業家の爲めに、労働者を欺瞞する詭辯に過ぎない、一國內に社會的水準以下の工場が存続することは、資本家にとっては資本の濫費であり労働者にとっては精力の浪費である。假りに一萬噸級の貨物船を造るのに、百五十萬圓で足りる處を百八十萬圓でなければ出来ない工場があるとすると、其差の三十萬圓は、

(一)餘計な原料を使はねばならぬ事、(二)普通以上の利子を負擔する事、(三)平均以上の手間を要する事等から起る、餘分な利子を負擔するのは信用の缺乏を別にすれば建造日数が長くかゝる事から生ずる。次に原料を餘計に使ふのは、機械が悪いか、労働方法が間違ふてゐる結果である。此二つは企業才能の缺乏から來る資本の濫費であつて、全く貨財を泥溝に棄てると同じである。普通以上の手間を要するのは、機械工作具が悪い爲めか、労働方法が間違ふてゐる爲めであつて、之れは企業才能の缺乏か

ら來る労働者精力の浪費である。斯くして一萬噸について三十萬圓の損が起るとし、それ等の造船所で年十萬噸宛造つてゐるとせば、年々三百萬圓宛損をする。随つてそれだけ社會全體の分配額が減るのである。他の一面百五十萬圓で造船し得る會社が、矢張り毎年同噸數を造つてゐるとする、一ヶ年の需要が二十萬噸であるならば、それ等優良な造船所にしても、不良造船所の閉鎖されるまでは、事業を擴張することが出來ない、能力過剰を惹起して、利潤が無くなるからである。若しも不良工場が徐々に閉鎖されて往けば、それだけ擴張の餘地が出来るから、其處に働いてゐた労働者は漸次その新工場に收容されて、精力の浪費を免れることが出来る。同盟罷工によつて大工場が急に閉鎖される場合には、右の如き自然的移動が起り得ないから、一時的には勞力移轉に由る損失を伴ふが、究極に於いては此理論が實現する。随つて労働階級全體の利害から云へば、不良工場閉鎖は、決して忌むべき事ではない。

或は曰はん不良工場の閉鎖と雖、それに投下された丈の資本の放棄を意味するから、それだけ資本の供給額を減じて、賃銀低下の素因を成すものであると。若しも閉鎖さるゝ工場の投下資本額が、一時に現存資本額の二三割にも上る如きことあらば、左様な事實も認めねばならぬが、左程大規模の閉鎖は製品の需給關係から起るべき筈がなく、假りに又生産設備能力が、二三割方も需要を超過してゐるならば、企業家は労働者の要求が起る以前、自發的に生産制限を行ふて、勢力の需要を減少させる。企業家が自發的に、生産制限をする場合には、その賃錢に及ぼす悪影響を看過し、労働者の要求に由る場合にのみ、勢力需要の減少を説くのは、詭辯にあらずして何ぞや。

#### (四) 労働と社會の利益

純經濟問題としての労働爭議は賃銀契約の公正を保たんが爲めに起るもので、國家

がそれに干渉する場合には、可成仲裁の範圍に止めるを可とするが、社會問題としての労働者の保護は、全然其意味を異にし、社會の存續發展を擁護する上に於いて、極めて必要な政策である。勢力の提供は貨物のそれとは違ふて、必ず労働者の心身を勞せしめる。此點に於いて勢力の雇傭は、全く貨物の賣買と趣を異にする。假令成年者と雖、過度の勞役に服せしめることは、其生存を危ふし、子孫保育の重任を全ふするを妨げる。機械の使用に伴ふ危険や、鑛山に於ける事故の發生等も、同様に労働者の生命を脅威して、社會に損失を與へる。況んや未だ成熟せざる兒女を、工場鑛山に使用する如き場合に於いてをや。英國は工鑛業の最も發達せる國であり、随つてそれに従事せる労働者も、總人口に比して頗る多い。千九百十二年の統計に依ると、それ等労働者の總數は千五百二十萬人に上り、其中定職のあるもの、みで、千四百四十萬人内成年男子は八百萬人、少年は百九十萬人、成年女子三百萬人、小女百五十萬人とい

ふ振合になつてゐるが、若し法律によつて幼年兒女の使用年齢を制限してゐないならば、その割合は更に多くなつてゐたであらう。此種の立法に於いても、英國は最も進歩してゐる、千八百二年の『衛生及道德條例』を手初めに、引續き工場法の修正を行ひ、(一)幼年男女の雇傭年齢を制限し、(二)幼年工及女子の労働時間を制限し、(三)夫等の深夜就業を禁止し、(四)機械及鑛區の危険防止設備を強制し、(五)衛生上の必要設備を規定し、(六)成年男子の労働時間を制限する等、凡そ労働者の心身を保護するに必要な手段は、略ぼ遺漏なき程度まで實行してゐる。經濟行爲の目的が、種族の維持繁榮に在る以上、過度の勞役によつて、労働者の心身を害することは、一時的には國富増進の効果を示すにしても、結局に於いて社會の衰頹を來すものである。我國の工場法が頗る不備であつて、労働者の健康と生産物との交換とを行はせてゐる如きは、目前の利益の爲めに百年の大計を誤らしめるものである、個人の利益と社會のそ

れとは必ずしも一致せぬから、自然に放任して置けば、労働者心身の虐使は必ず行はれる。之れはどうしても法律の力によつて、取締まらねばならず、労働者の傷害保険の如きも、或る程度まで強制する必要がある。

最近に於ける英國の風潮は、此種の労働者保護政策を單に労働状態の制限に止めず賃銀契約の上にも及ぼさうとしてゐる。即ち最低賃率又は必須賃率を規定せんとするものが、その結果であつて、其處まで往かねば労働者階級の保護は、徹底しないといふのである。之れは經濟學上の最大難問題であつて、簡單に批評し得る限りでないから姑く後日に譲つて置く。

### (五) 所謂階級争闘の意味

曩きにも屢記したように、現代の如く資本の貸借が盛に行はるゝに至つては、純粹

の資本家は唯市場金利を得るに満足せねばならぬ。労働者を雇傭して、それを使役するものは、企業家又は企業家を兼ねた資本家であつて、雇傭契約は企業家としての資格で行はれるのである。企業家は敷地、資本財及労働者の撰擇及利用によつて普通以上の利益を収めんとするもので、其方法としては、(一)他人より安く造ること、(二)他人より多く賣ること、(三)他人より高く賣ること等が行はれるが、勿論第一の方法が基本となるのである。其處で被傭者たる労働者に對しては、出来るだけ有利な契約を結ばうとし、若くば既成契約を自己に都合の好いように利用しようとする。斯くて企業家と労働者とは、最初から對抗的地位に置かれる。換言すれば古代に於ける治者と被治者との如き關係に立つ。有史以來、社會の内部に於ける争闘は、常に此二つの階級の間に行はれ、奴隷が農民となり、農民が地主になり、地主から治者階級を出すやうになつたが、當今の大組織産業は、古代の一都市にも該當するほどの人口を包容し

てゐるので、其支配下に於いて、遂に階級争闘の發生を見るに及んだのである。

社會全體として見れば、資本も勞力も土地も、自由競争によつて、相當の評價を下さるべきものであるが、資本が資本財として一つの工場に投下されるべき、労働者が雇傭契約によつて、一定の勞役に服したとき、土地が敷地又は耕地として利用さるゝに至つたとき、各自皆企業家の意思の下に、特定の生産に参加するから、其價值を變化させずに、市場に再現する資格を失ふ。生物でない土地や資本財はそれに満足するが、勞力は労働者に附屬してゐるものであるから、然うは往かない。企業者が無理な要求をし、又は間違ふた使ひ方をするとき、労働者はそれに反抗する。其反抗には正当な場合と、不合理な事とがあるが、無理にそれを抑壓するのは、必ずしも企業家の利益ではない。其處で近年の風潮は少し宛ても労働者に發言權を與へる方に傾いてゐる。此傾向は今後次第に發達し、一般的に或る程度の合議制が採用される處まで進む

であらう。企業利潤と賃銀との關係ほど、複雑なものはなく、自由競争の下に於いて常に公平が保たれるといふのは、勞力の移轉が多額の失費を伴ふことを、看過せる議論と云はねばならぬ。

### (六) 國際競争と勞働條件

現今では何處の國でも、或る程度まで勞働者保護の手段として、工場法等を施行してゐるが、或る一國が餘り嚴重な勞働規定を設くれば、其國の各種産業をして、他國の同業者と競争する力を喪失せしめ、國際競争場裡に於いて劣敗者となる虞ありと考へられてゐる。其結果勞働規定の標準を、國際的に一致させようとする運動が起り、今ではそれが國際聯盟の一事業になつてゐる。而かも我國の如きは、産業の發達が尙ほ幼稚であるのを理由として、それに對する例外を求め、婦女子の深夜業廢止すら、

まだ實行する運に至つてゐない。

之れを我紡績事業の如きに就いて見るに、假りに深夜業を廢止するによつて、生産高の三分の一を減ずるとせば、一相當りの利益を同じものとして、會社の利益は減少する、固定設備を三分の一減かすのと同様だからである。併し人類本來の性質から云へば、晝は働いて、夜は寝るのが當然なのであるから、深夜業をすといふことが、初から間違ふてゐるのであつて、外國人が寝てゐる間も、働かねば競争が出来ないとすれば、企業組織の何處かに、缺陷があると見ねばならぬ。幼年子女の健康を犠牲にしてまで、或る種の産業を維持するといふことは國家百年の利害より打算して、果して得策なりや否や。經濟行爲は人類生存の手段であつて、その目的ではないのであるから、本末を顛倒してはならない。

曩きにも記せる如く、國際間に於ける産業競争は、天然富源の多少と、文化の程度

が異なるにつれて、根本的に優劣の差を生じ、決して同一水準に於いて行はれない。随つて生産条件の不利な國民は、低劣な生活に甘んずることによつてのみ、對等の地位に立つことが出来る。低劣な生活に甘んずるといふのは、賃銀を低め物價を引下げることである。日露戦争前の日本は、正しく此理論に適合してゐたが、其後は政府が通貨政策を誤り、企業家が謹慎を缺いた爲めに、物價を割高ならしめ、延いて賃銀を騰貴させて、國民をして實力不相應の生活に慣れしめた。其結果として無理な労働方法をも、禁遏することが出来ないのである。此點に關する詳しい説明は何れ日本産業の批判を試むる場合に述べる。因に前記千九百十二年に於ける英國成年男子労働者の平均収入は、一ヶ年約六百六十圓で、大戦後の今日では、その二倍近くになつてゐようが能率の上から計算すれば、慥かに我國より割安なるべく、米國の賃銀は世界第一の高率と稱せらるゝが、同時に能率との比例に於いては最も割安だと認められてゐる。

## 第十四章 信用の發達と其結果

### (一) 資本の威力増大

産業革命以前と現代とを比較して、特に著しく相違してゐる點を列擧すれば、(一)生産者と消費者の距離が、次第に遠くなつたこと、(二)その結果として運輸業が益々發達し、商人の活動範圍が擴大したこと、(三)生活の様式が複雑になり、所謂必需品の程度が高められたこと、(四)集團生活の意識が鮮明になつて、自然放任主義の經濟政策が、次第に人氣を失ふて來たこと、(五)産業組織及び商品の標準化運動が、益々熾んになつて來たこと、(六)人口移動の方向に多少反動的傾向を見るに至つたこと、(七)空間及び河海の利用が漸く熾んにならうとしてゐること、(八)天然物濫費の弊が現はれて、富源保護の必要が感ぜられて來たこと等であるが、それ等の進化を一貫し

て、資本の威力が益増大して来たことは、看過し難い重要事項である。而して生産界に於ける資本の必要が、痛切になればなるほど、それを巧妙に活用せんとする慾望が起り、其手段として信用の利用が激しく行はれるようになった。斯くて現代の經濟界は、全く信用制度を基本としてその運動を繼續してゐる。而して信用制度維持の重任を負ふてゐるものは、金融市場を支配する銀行業者である。其處で多くの經濟學者は金融を以つて、經濟界の血行に喩へ、銀行をその心臓と唱へる。經濟界全體を一つの有機體に喩ふれば、右の比喩は如何にも適切である。當今の經濟界が常に金融の一張一弛に支配されるのは、恰かも人間の健康状態が、血行の良不良に支配される如くである。

現代に於ける信用組織を微細に分解することは、可成り六ヶしい仕事である、二重にも三重にも入組んでゐるからである。併し大きく區分すれば、血行機關が靜脈と動

脈との、二つに分けられる如く、金融は貸方と借方との、交互關係から成立つものであり、銀行はその双方を聯結する心臓なのである。靜脈たる貸方の資金は、銀行の手を通つて、動脈たる借方の手に移り、其處で資本としての活動を開始する。而して此資金の循環作用を中心として、經濟界には種々の變化が起り、景氣不景氣の原因を生む。現在の經濟組織に於いて、此種の波動を絶無ならしめることは、到底不可能であるが、金融組織の完備せる國ほど、其波瀾を小さくする、信用の濫用が抑制されるからである。

現代の經濟界に於いて、景氣の循環は避け難い現象であり、隨つて物價の騰落が常に繰返さるゝと同時に四種生産要素に對する報酬、即ち利子利潤地代賃銀も、それにつれて動き、久しきに亘つて平準状態を保つことは、有り得ない。その波動は如何なる徑路によつて、どんな風に起るか、之れが次に述ぶべき『經濟界の循環的變動』の

主題である。次卷には此問題を詳しく説明して、經濟學上に於ける理論と實際とが常に必ずしも一致しない事實を、立證したいと思ふ。

## (二) 歐洲大戰費の調達

現代の信用組織が、どの位重要な役目を果してゐるかを、適切に示したものは、歐洲大戰時に於ける各交戦國の巨大なる軍事費の調達である。關係各國の軍事費總計は三千七百二十億圓の巨額に達し、其内英國は七百二十八億圓、佛國は六百九億圓、米國は四百五十九億圓、露國は五百五十八億圓、獨逸は六百六十六億圓、奧太利は三百四十三億圓、伊太利は百七十億圓を支出してゐる。此大部分は國債によつて調達されたもので、即ち國家の信用によつて、國民及び外國人から借用したものに外ならない。若しも政府の力により、信用が維持されなかつたならば、此の如き巨額の資金は調達

することが出來ず、戦争は短期間に終つたかと思ふ。

三千七百億圓といふ巨大な軍費は、戦前の貨幣價值を標準にして計れば、各交戦國の國富の過半に該當する。而かも國富計算には移動し得ないもの、即ち不動産が大半を占めてゐるのであるから、それを戦争の目的に使用することは不可能である。斯くて右費用の大部分は、開戦の少し前から開戦後の數ヶ月間に亘る五ヶ年餘の間の、世界各國民の新所得の内から、支辨されたわけである。戦前に於ける英國國民の収入は、三十八億圓と概算されてゐるから、五年間に亘つて七百二十八億圓を支出したとすれば、總収入の七割三分弱を戦費として使ふた勘定になる。之れは到底國民の堪へ得べき事ではなかつた。實際に於いては戦費が國民收入に喰込んだ割合は、多くも二三割を超へなかつたであらう。戦争の進行につれて、列國は通貨を増發して物價を騰貴させ、それにつれて信用を擴張させた爲めに、戦費は益嵩む一方であつた反面、貨幣計



算に於ける國民收入も、それにつれて、膨脹し、戦費の負擔能力が増大したのである。それにしても、若し右の軍費が、英本國丈けで調達されたならば、國內の財界は絶大な壓迫を感じたに相違ない。處が實際は(一)戦前に於ける對外債權の回收、(二)外國よりの新規借入れ、(三)無準備紙幣の發行、(四)殖民地よりの補給、(五)公債交付による支拂實行等によつて、増稅率を緩和し、且つ内國債の新規發行に伴ふ金融の緊縮を幾分か緩和することが出来たのである。是れ等の方法中、不換紙幣の發行が、最も便利である爲に、獨逸露等の諸國に在つては、その手段が濫用されて、遂に貨幣の信用を失墜せしめ、財界を混亂状態に陥らしめた。此の如きは戦争の目的を達する爲めに、過度に信用を利用したものに外ならぬが、平時に在つても展信用の濫用が行はれて、恐慌を惹起することがある。此點は何れ後に説明するであらう。

### (三) 複雑極まる貸借關係

單に表面から見た丈けでも、當今の我國に於いて、どの位巨額の貸借關係が出来上つてゐるか、判る。即ち政府の公債丈けでも五十四五億圓、地方債が六億數千萬圓、銀行會社社債が二十二億數千萬圓、銀行の貸借が百億圓内外、郵便貯金が十一二億圓合せて二百億圓内外、尙ほ其外に保險契約とか、賣買先約定とか、懸け賣勘定とか、信託契約とか、あり、それ等も皆貸借の變態である。就中株式及商品の先約定賣買高は時としては銀行勘定にも劣らぬ巨額に上つて、財界の變動を起す素因となる。

現代の企業家は概ね他人の資金を利用して、各種の事業を經營してゐる、その最も普通の形式は株式組織であつて、其投資額丈けでも既に百億圓を超へてゐるが、之れも亦見方によつては、一種の貸借である。而してそれ等の會社は、株主勘定以外に巨

多の貸借關係を有し、金融業者との間に、密接な交渉を持つてゐる。斯くて事業會社の盛衰は直接間接に金融市場に影響すると同時に、金融の繁閑も亦事業會社の營業状態に至大の影響を及ぼす。是れ等の事實が基本となつて、景氣の循環を惹起すが爲めに、利子や賃銀や物價が常に變動して、分配の公平を攪亂する。經濟學の研究中、最も興味のある部分は、その波動の結果を探究することである。

## 經濟動態の研究第一卷(終)

# 經濟動態の研究第二卷

## 經濟界の循環的變動

### 緒論

數十年數百年の長期に亘つて考察すれば人類の經濟的活動は、一定の傾向を保つて常に進歩發達の一途を辿るが、五年とか十年とかいふ如き短期間丈けを見ると、或は退歩の外觀を呈することもあり、或は異常の發展速度を現はすこともある。換言すれば經濟的進化の道程は、平調な斜線ではなく、波狀形を成す斜線によつて、表はさるべきものである。前卷に於いては、その斜線の大體の方向を説明したから、今度は波狀線の出來る理由と、それに伴ふ生産參加者の利害を述べ、生産所得分配の根本原則

が、必ずしも理論通りに行はれ難い所以を解説する。

各國の經濟界が波狀線を成して進む形態を稱して、景氣の循環と唱へる。景氣の循環は貨物需給の平衡が、常に動搖すること、その對照物たる資金需給の平衡も常に動搖すること、の、二つの事實の交互作用から起るのであつて、外面的に觀察すれば金融市場の一張一弛が其原動力である如く見ゆる。併し詳しく探究して往くと、右二つの事實は密接不離の關係に立ち、その何れを主とし、何れを客とすることすら、不可能である。以下の説明を見れば、其意味は自から了解されるであらう。

## 第一章 生産消費の隔離

### (一) 農業經濟と景氣循環

中世紀以前に於いても、或る程度の景氣循環が行はれたかどうかを確めることは、

可成り困難である。分業が發達して、生産と消費との一致が保たれなくなると同時に當然需給の不適合が起らねばならぬが、而かも信用組織の幼稚な時代に於いて、それがどんな結果を惹起したかは、能く判らないからである。唯歴史的事實として傳はつてゐるのは、農作物の豊凶が、景氣の消長を惹起したこと、天災地變や物價の急變によつて、經濟界の平和が、攪き亂されたこと位のものである。生産と消費の隔離は慥かに景氣循環の動機となるが、併しそれが金融組織と結び付いた後でなければ、農作物の豊凶以外に、經濟界の週期間變動を惹起すものは、稀有であつたと想ふ。産業革命以前に在つても、農作物の豊凶だけは、或る程度まで景氣不景氣の原因となつたのである。

當今の我國に在つては、農作物の豊凶が景氣消長の原動力となることは、極めて稀れであり、時として凶作が却つて好景氣の外觀を呈せしめることすらある。明治以前

に在つては、米穀が或る程度まで貨幣の代用をしてゐた、租税(實は小作料)が米納制度になつてゐると同時に、士族階級の給與が、それによつて定められてゐたからである。斯くて米産額の減少は、通貨の縮小に相似た結果を生じ、直ちに不景氣の原因となつたのであるが、米納制度の廢止以來、通貨代用の性質を失ひ、他の一般商品と同様に、産額の減少割合よりは、それに伴ふ價格の騰貴率の方が、遙かに強くなつて來たから、凶作の場合に於ける地主の所得は却つて増加することもあり、不作は必ずしも不景氣の原因とはならないのである。

農作物の豊凶が、經濟界に如何なる影響を及ぼすかに就いては、後に再説する積であるが、此際是非も説明して置かねばならぬのは、景氣循環の過程を説くに當つて農村の状況を比較的輕視する點である。之れは商品市場に於ける農産物の位地が幾分低下した爲めでもあるが、更に重要な理由は、農業には他の諸事業ほかに、複雑な貸

借關係が成立つてゐないのと、資本集中の傾向が微弱なものと、生産設備を人爲的に増大する機會が乏しい爲めである。但し農産物市價の騰落が、多少生産規模を伸縮させるとか、重要農産物の豊凶が、貿易や賃銀の上に影響するさかいふ事實は、常に反覆されるから、それが景氣の消長に影響する場合は、頻繁に起る。是れと農村經濟を輕視する事とは、別個の問題とせねばならぬ。

## (二) 商業に伴ふ危険

農業中心時代に在つても、生産者と消費者との距離は、次第に擴大してゐたのであるから、隨つて其間を結び付ける商人は、仕入れから賣却に至る期間、市價變動の危険を、負擔せねばならなかつた。けれど十九世紀以前に在つては、取引の行はるゝ範圍も狭く、信用を利用して資力不相應の買持ちをする機會も乏しく、且つ商人間の競

争も激しくなかつたから、戦争や天災に由る以外眞面目に營業してゐるさへすれば、破綻する如き危険は起らなかつた。商業區域が國際間にまで延長し、それに伴ふて信用の利用が盛んになり、其上販路争奪の競争が激甚になつた當今では、商人の負擔する危険は過度に増大して、少しでも需給の觀測を誤れば、忽ち全資産を失はねばならぬ形勢を作り出した。此危険を緩和する手段として、委託販賣の制度や、先物取引の習慣が生れたが、時としては賣買先約の存在が、相場の波動を大きくしたり、商人破綻の原因になつたりすることもある。詳しいことは取引所の機能を述べる場合に説くが大正九年の恐慌や、その後には於ける思惑者破綻の頻出は其實例と云ふことが出來よう。商品市價の騰落は、需給均衡の動搖に基くのを通例とするが、平時に在つては需給動搖の程度も略ほ限定され、且つは需給過不足の發生を、事前に豫測する便宜もあるから、商人をして甚しい錯誤に陥らしめる場合は尠い。戦争によつて各種貨物に對す

る需需の分布が激變するとか、通貨の増減によつて物價が著しく變動する如き際には需給均衡動搖の範圍が大に擴大されるから、如何に用心深い商人でも、市價騰落の觀測を誤まつて、全く豫期せざる損害を被ることがある。而して商人が豫想外の損益を被るときは、その事自體が又市價變動の原因になる。由來經濟界の變動は、或る程度までは加速度を以つて進行するもので、大抵の場合に常識判斷を超越する。

若しも商人の大部分が、自力で營業してゐるものであるならば、商品市價騰落の波動は、生産者と販賣業者の範圍に限られるが、大抵の大商人は其資金の大半を銀行に仰いでゐる爲めに、其波動は忽ち金融業者に及び、時としては過度の繁榮状態を演出し、時としては恐慌状態を演出せしめる。是れは現在の經濟組織に伴ふ、必然的な病弊だと云ひ得られる。

## (三) 企業家の誤算

大抵の貨物に對する需要は、生活の向上と人口の増加につれて、漸増する傾向を示すものであるから、生産者は唯それに順應して、生産高を増して往けばよろしい。但し同業者中に卓越した企業家があつて、廉賣によつて販路を侵略する時には、比較的不利な位地に立つた生産者は、需要漸増の恩恵に浴することが出来ず、却つて生産高を減少させて往くこともあるが、此種の變遷は極めて緩慢に、且つ部分的に起るものであるから、其商品の需給状態を著しく動搖させることは稀れである。

處が實際に於いては、生産者が需給の觀測を誤まつた爲めに、市價の變動を惹起す場合が頻發する。それは通貨の下落によつて、物價が著しく騰貴する時とか、戦争や天災によつて、需要の方向が急變する場合に於いて、特に甚しいが、平時に在つても

常に需要高に相應する生産高を維持して往くことは困難である。農業に在つては、それが天候の良否に基く作柄の豊凶から起るのであるから、已むを得ないとしても、工業に於ける供給の過不足は、人爲的に調節し得べきに拘らず、實際は概ね若干の喰違を示し、何れかと云へば供給過剰を示す場合が多いのである。

姑く貨幣使用の事實を省略して考へるとき、總ての貨物は相互に相對立して交換されるものゆへ、換言すれば當今でも本質的には矢張り物々交換が繼續されてゐるわけゆへ、總ての商品の全般的供給過剰といふことは有り得ない。随つて工業産物が概ね供給過剰を示すといふのは、農産物が概して不足する傾向を持つといふことになるが仔細に研究して往くときは、一般に供給過剰と唱へらるゝ事實が、單に金融難を表示するに過ぎない場合が多い。曩きにも説明した如く、現代に於いて供給の過不足といふのは、單に豫備的貨物即ち市場在荷の多少を指すものであり、而かも在荷の多いと

きに、供給不足の外観を呈したり、其尠いときに、供給過剰の外観を呈するところが尠くない。是は全く金融の繁閑によつて、需給の真相が蔽はるゝのである。礦工産物に對して、屢供給過剰が唱へらるゝのは、それ等の生産者が農業者に比して、銀行を利用する機会が多いからである。されば金融事情を無視して、貨物の需給を説くことは、殆んど不可能に近い。

工礦産物が動もすれば供給過剰に陥るイマ一つの理由としては、それ等を生産する設備に巨多の資本が投下されてゐる關係上、出来るだけそれを活用せんとして、自然に需要額以上を生産する傾向あることを擧げ得る。之れは勿論農業との比較に於いてのみ言ひ得ること、農業にも同様の事情がありとせば、前記物々交換の原則によつて、供給過剰の事實は起らず、唯貨幣との釣合に於いて、過剰状態を示して、物價の低落を惹起すに過ぎない。是れ等の問題は實に六ヶしいものであるから後に説明す

る處と對照して、初めて了解されるであらう。

#### (四) 耐久資本財の需要

手持在荷が商工業者の重荷になるか否かといふ關係以外、金融の一張一弛は生産設備の擴張を促がし、又は抑へることによつて、貨物の需要を増減せしめる。一般消費財の需要も購買力の増嵩によつて、若干の動搖を示すが、併し購買力増減の根元に遡れば、矢張り耐久性資本財の需要の増減が、其原因を成してゐることを發見しよう。各種貨物の需給は常に必ず相對的關係に立つ、換言すれば貨幣使用の有無に拘らず、結局は物々交換の状態を離脱しない。隨つて或種の貨物の需要が減るといふことは、それに對して提供さるべき貨物の減少を意味する。反面から云へば、提供さるべき貨物の減少が、即ち購買力の減少なのである。生産設備の擴張が旺んに行はれて、耐久

資本財が大に需要されるとき、それ等資本財の供給は消費財に對する需要となる。所謂好景氣と唱へらるゝ時期に於いて、總ての貨物の取引量が激増する、資本財の需要増が忽ち消費財の需要を増加させるからである。不景氣時代即ち新企業沈睡期には、資本財の需要が減るから、それが他の貨物の需要をも減少させるのである。之れを更に平易に説明するには、生産設備擴張時代には、勞力の需要が殖へるから、購買力が増大して、消費財の需要が増すのだと言ひ得よう。畢竟するに景氣といふのは、經濟社會全體の活動が膨脹又は收縮する狀況を指すのであつて、而して其伸縮を惹起す原動力は、實に金融係に他ならない。然らば何故に金融市場が、常に右の如き變動の原動力になるかと云へば、資本の蓄積時代と活用時代とが、交互に相循環して現はれるからである。

當今列國の富の大半は、各種の耐久資本財であつて、土地建物家畜の大部分も其中

に計上されるが、姑くそれ等を除外すれば、工業機械器具と、鐵道及附屬品と、電車船舶水力事業等が、主要部分を占めてゐる。千九百二十二年の調査に係る米國の富は二千二百八億餘弗と稱せらるゝが、其内不動産が千七百六十四億弗、家畜類が五十八億弗で、全體の五割六分八厘を占め、其外に在つては、工業機械器具が百五十七億弗、鐵道及附屬品が百九十九億弗、電車自動車船舶水力事業が百九十九億弗と計上され、運輸及水力設備費丈で四百億弗に近い。前記不動産の中で之れに附屬するものを加算すれば、現代社會に於いて工業及運輸業が、如何に多くの資本を吸収してゐるか、推測されよう。随つてそれ等資本財の需要の消長が、貨物及勞力市場を支配する力の強いことも、略ぼ想像し得られる。企業擴張期と沈衰期とに於いて、經濟活動の範圍が著しく伸縮するのも、當然と言はねばならぬ。資本蓄積時代に於いて、景氣が悪くなるのは、主として之れが爲めである。



## 第二章 金融市場の繁閑

## (一) 資金の過不足

現代の經濟社會に於いて、銀行の務める役目は、剩つてゐる資金を預かつて、足りない人に貸すのであるから、借手の選擇を誤りさへせねば、何等の支障も起らないわけだが、實際は銀行營業ほど六ヶしいものはない。資金の需要と供給とが常に齟齬して、金利の騰落を惹起すのみならず、それに伴ふ經濟界の變動が、絶へず借方の資産状態を變化させる爲めに、思ふように利鞘を收めることが出来なかつたり、回收確實と信じた貸出が、期限通りに回收されなかつたり、強いて回収しようとするれば、損失を招くような場合が、起つたりするからである。

一 國內に於ける資金の需要と供給とは、外國貿易の順逆とか、國債の發行償還とか

突發事件の影響とか、信用の増減とか、取引の繁閑とか、新企業の盛衰とかによつて常に變動する。無論その中には豫測し得るものも、然らざるものもがあつて、銀行業者の判斷を迷はせる。而して其判斷が間違ふた場合には、忽ち需給の齟齬を來すと同時に、經濟界の各方面に色々の影響を與へる。

資金の需給は表面的に云へば通貨の需給である。資金の需要超過は、通貨の缺乏を意味し、供給超過は通貨の過剰を意味するわけだが、普通の取引關係に於いて餘計な貨幣が流通してゐたり、貨幣が缺乏を告げたりすることは有り得ない。貨幣の増減は直ちに物價の騰落と取引の繁閑とを惹起して、過不足なからしめる。通例金融市場に遊金があると稱せらるゝときは、通貨の收縮してゐる時であり、資金が不足してゐると唱へらるゝときは、通貨の膨脹した時である。元來金融市場に於ける資金の過不足とは、信用の基礎の強弱を指すのであつて、それは通貨分量の増減とは、反比例する

即ち貨幣流通高が殖へれば殖へるほど、信用の基礎は薄弱になり、減れば減るほど、信用の基礎は強固になる。十分に此點を理解しないと、金融の緊縮さか、緩慢とか云ふ言葉の意味が判らない。

## (二) 信用維持の基本

貨幣發行高の中で、銀行の庫中に貯へらるゝもの丈けは、豫備隊として其時の流通高からは除外さるべきであるが、而かも實際に於いては、貨幣の此部分が、最も活潑に働いてゐるのである。當今では之れを基礎として、その五六倍に相當する手形が流通してゐるからである。稍や大量の取引は、總て手形によつて決済されてゐる。我國に於ける毎月の手形交換高は五六十億圓にして、全國組合銀行手許現金の二十倍内外に相當する。平均三億圓ほどの預金準備を基本にして、一ヶ年七百億圓の取引が行は

れてゐるのである。其處で手形流通高に對する銀行手許現金の割合が、金融の張弛を測定する唯一の手懸りになる。手形流通高は預金の現在高と形影相伴ふものであるから、預金に對する手許現金の割合即ち所謂預金準備率の高低が、金融の張弛を示すバロメーターとされる。

銀行は僅少の利鞘を取つて、利益を擧げて往くものであるから、出来る丈け手許現金を少くして、資金を十分に利用しようとする。預金利率を平均年率五分とし、貸出利率を八分として、十億圓の預金を持つてゐるとする。預金準備を二割残せば、八億圓に對する八分即ち六千四百萬圓の利子收入に對し、五千萬圓支拂ふから、利益は千四百萬圓に過ぎない。預金準備を一割で濟ませば、支拂利子の五千萬圓に對し、收入利子は七千二百萬圓になるから、差引二千二百萬圓の利益が收めらるゝ。斯くて預金準備を減じ得れば得るほど、銀行は有利な位地に立つ。随つて當今では組合加入銀行

の平均準備率は、百分の七八に降る場合が多い。

併し唯それだけでは、取付け騒ぎでも起つた場合に、忽ち狼狽せねばならぬ。其處で手堅い銀行は、第二準備金の意味で、コール即ち時貸として、若干の資金を運用し必要な場合には何時でもそれを回収して、支拂資金に充當する。けれども一方に時貸をしてゐる銀行があれば、他方には時借をしてゐる銀行があるわけゆへ、總準備率は變らないわけである。唯借方銀行は概ね外國爲替業務を取扱ふてゐる特殊銀行であつて、時借を返還する必要に迫られたときには、中央銀行から借出し得るこいふ點に、第二準備たる意味が存する。畢竟するに市中銀行の手許現金に次いで、預金準備の第二豫備隊となるものは、日本銀行の貸出餘力である。

理論上、日本銀行の制限外發行高は、その極限を定められてゐないから、第二線準備金は無限にあるわけだが、實際に於ける貸出能力は、色々の事情によつて局限され

る。此自然的制限は、之れを二部に區分して見るのが、便宜である。第一は日本銀行それ自體の貸出能力制限、即ち正貨保有高に對する紙幣發行高の割合、第二は借方銀行の信用上の制限、即ち擔保能力の缺乏である第二線準備の厚薄は、是れ等の情況によつて定まるもので、之れを無視して金融の張弛を説くわけに往かぬ。

### (三) 信用濫興の徑路

景氣の循環は資本の活用時代と蓄積時代とが、相交替して起る爲めに生ずる。資本の蓄積さるゝ間、金融は次第に緩み、金利が低落して新企業を刺戟する。新企業が旺んになるにつれて、物資の需要が増大して、金融を引締め、金利を騰貴させ、遂に新企業を抑制して、蓄積時代に轉換せしめる。此交互作用は何處の國にも、必然的に行はれることであるが、日本の如く産業の進化が半熟状態に在る國に於いて、特に著し

く現はれる。過去三十年間の歴史は、その最も適切な例證とすることが出来る。

元來貯蓄の行はれる動機は、疾病災害老衰等に備へる爲めであるが、利子添加の習慣が確立した今日では、何人も皆出来る丈け高利にそれを運用せんとする。斯くて利殖の慾望は、時として貯蓄本來の目的をも、忘却せしめることがある。新企業勃興時代に於いて、大抵の資本所有者は利殖慾に眩惑して、冒險的投資を敢行する。その結果、信用が過度に利用されて、概ね或る程度の恐慌を惹起し、その後數年間に亘つて資本の蓄積時代を繼續せしめる。大正九年から十四年に至る間の如き、明治四十年から大正四年に至る間の如き、皆それである。

如何にして信用が過度に利用されて、恐慌を惹起するような事になるか、最初は消費節約資本蓄積の反動によつて、徐々に生産規模を擴大させるが、その過程が加速度を以て進行する裡に、冒險的投資が誘導されて、結局金融市場の實力に相應しない處ま

で、取引が膨脹して了ふのである。此實際上の手續きは、實例によつて説明するのが最も判り易い方法であるが、我國に於ける過去の企業勃興時代は、概して國際戰爭を背景として現はれてゐる爲めに、若しも戰爭が起らなかつたならばとの疑問が生ずる實は明治二十六年にせよ、三十六年にせよ、長い間の不況時代を享けて、金融は甚しく緩慢状態を呈し、戰爭がなくとも、或る程度の好況期を迎ふべき順序であつたが、戰亂突發の爲めに、新企業増進期の到來を遅らすと同時に、後に至つて却つて急激に企業熱を煽り、當然起るべかりし波動を、特に甚しく擴大したのである。歐洲戰爭當時の企業熱昂進も矢張り同様に見ることが出来る。

戰爭の如き特殊原因が無くとも、資本蓄積時代が數年間繼續して、銀行の預金準備が過度に増加して、金利が甚しく低落すれば、差當つては既發行株式市價の騰貴が起り、それが新企業計畫を誘發して、耐久資本財の需要増加から、經濟活動の規模を擴